

げんこつ団

『コースターター』

2018年10月17日～21日 駅前劇場

一十口裏

上手奥に電車座席と、電車ドア2つ。その向こうは、駅ホーム。
上手前と下手には、隣の車両に続くドア。奥の壁には映写スクリーン。客席には「優先席」の看板。
※客入れ・客出し、及び、劇中に使用する音楽は全て、現代・前衛ジャズ系、或いはアコースティックな楽器によるもの。

開演時刻になったら、車内アナウンスが流れる。

アナウンス 「本日は、げんこつ団『コースターター』をご利用頂き、誠に有難うございます。
お客様にお願い申し上げます。車内での飲食、喫煙、写真撮影は、他のお客様のご迷惑となりますのでご遠慮ください。また、優先席をご利用のお客様は、必ず、携帯電話、スマートフォンの電源を、お切りくださいませ。皆さまのご協力を、お願いいたします…」

SCENE 『優先席』

アナウンスの最後が爆音で掻き消され、悲鳴や助けを求める声と共に、明転。
下手から、服が破れ、血まみれになった五十嵐と男がやって来る。
男は腕が一本、吹き飛んでいて無い。

五十嵐 (男を支えながら) 大丈夫ですか
男 (息切れ、倒れる)

女1、怪我した足を引きずりつつ、下手からやって来る。

女1 (下手を振り返りながら) え、なに？なんなの
五十嵐 (男に) しっかりしてください
男 (うめき声)

急に何か光って、そしたら(と、男を見て悲鳴をあげる)

女1 (女1に) ハンカチか何かありませんか？大きめの
え？

五十嵐 止血をしないと
女1 (怪我をした足が痛みつつも) ハンカチ、ないです

五十嵐、スーツの片袖を引き千切り、それで止血を試みる。
そこに女2が下手からやって来る。腹から内蔵が一部、出ている。

女2 寛人…、寛人…！(倒れる)

女1 (悲鳴等あげてから) え、やだ、大丈夫ですか

女2 寛人が…、さっきまで一緒に居たのに…！

男 (うめき声から声を振り絞り) …ここに来る途中に、男の子が

女2 え

男 あっちの車両で…

女2 あ…(と、下手に戻るうとするが)

五十嵐 (思わず女2を止め) 待って

女2 離して

五十嵐 危険ですから

女2 だって寛人が！

女1 駄目ですって！

揉み合いになる三人。男、力を振り絞って三人に近づき、女2の足か腕を取る。

三人 (男2を見る)
男 お母さん…。その男の子は……。もう……………

問。

女2 ……嘘。……………嘘よー(頼れる)

そこに駅のアナウンスが入る。とても日常的なアナウンス。

アナウンス 「えー、お客様にご案内いたします。只今、当電車、荻窪駅におきまして、

「テロ」と見られる爆発がありました影響で、一時停車しております。

復旧作業が済み次第の発車となります。お急ぎの方は丸の内線への振替輸送をご利用ください。お急ぎの所ご迷惑をお掛けいたしましたして申し訳ありません」

アナウンスの途中で手奥から6人、通勤通学の人々がそれぞれにやってきて、アナウンスを聞きつつ、不満げながらも車内に乗り込むなど。

アナウンス 「えー、この電車、一時停車しております。

発車は十五分から三十分ほど後となる見込です」

スマホで情報確認したり小声で電話したり、駅の状態を見たりする乗客たち。

男 あ。あ。(と立ち上がり電車を降りようと歩き出すが、車両を出る前に三人を振り返り)

あ。私は、丸の内線で

五十嵐 あ。(うなづく)

女1 ……。

五十嵐と女1、男を見送ってから座席を見るが、座席は埋まっている。

五十嵐 (傷が痛み、声を上げる)

女1 (客席の方を指差し) あっちへ…！

三人、何とか舞台ツラまで辿り着き、横一列に。

そのときすでに胸元から鞆から、つり革を出しており、

それをそれぞれ片手で掲げて、客席を見つめる。

車内アナウンス 「この電車には優先席があります。

優先席を必要とされるお客様がいらっしゃいましたら席をお譲りください。

There are priority seats in most cars.

Please offer your seat to those who may need it.」

放送が流れる中、三人、痛みに呻いたり、苦しんだり、死んだりする。

アナウンスはそのまま音楽に変わり、映像へ。

FILM 『OPENING』

舞台上の座席に座った人々にも照明が当たったまま、映像。

走る電車とタイトル。駅員たちの指差し確認。線路に飛び降りる黒い影。

つり革を持って色々な場所を移動する、通勤通学の人々。

SCENE 『発車』

映像カットオフ。少ししたら、乗客女1、隣に座る乗客男1に、話しかける。

乗客女1 …すみません

乗客男1 はい？

乗客女1 ちょっと…足を……

乗客男1 はあ

乗客女1 足を、少しだけ閉じてもらえませんか

乗客男1 (自分の足を見てから) はあ…(と、足、少し閉じる)

乗客女1 ありがとうございます…

それぞれ自分の前に向き直り、少し間。

乗客女1 そしたら

乗客男1 はい？

乗客女1 心も

乗客男1 ？

乗客女1 心も少しだけ、閉ざしてもらえませんか

乗客男1 …え？

乗客女1 (無言で乗客男1を見たまま)

乗客男1 あ…:はい…:…(心を少し閉ざす)

乗客女1 (少し安心する)

発車メロディ。

アナウンス「お待ちいたしました。二番線、ドアが閉まります。

ご注意ください、ドア閉まります」

ドアの閉まる音。電車走行音が鳴りだす。

すると文庫本を読んだまま、乗客男2が一人、座ったまま席から一、二歩前進し、

走行音に合わせて横に移動していき、下手奥に消えていく。

走行音も、それに合わせて消えていく。

乗客女2のみが、それを目撃する。

乗客女2 えっ…？(乗客男2の去った先と、周囲を見回す)

乗客女1 ……なんですか？

乗客女2 いえ…、今、ここに居た方が……

乗客女1 え？

乗客女2 発車しました

乗客女1 え？

乗客女2 え？(と、再び周囲を見回し、乗客男1に) あの、今、見ませんでした？

乗客男1 え？

乗客女2 (下手を見て) あっ、ほら！

再び走行音が近づき、先程の男、座ったまま下手から上手奥に通過する。

乗客男1 (それを目撃して) あっ…！(と思わず立ち上がる)

追ってガシヤンと走行音が鳴り、
離れた席の乗客女3、4も、座ったまま一、二歩前進。

乗客女1・2 あっ……!!

乗客女3、4、それぞれ、座ったまま、スマホを見たり寝たりしたまま、
四方八方に発車されていく。

乗客男1 …ちよつと!

追ってみるものの、走り去っていつてしまう乗客女3、4。
三人のみ取り残された車内。

少ししてから、上手のホームに「車掌や電車の真似をしてしまう男」が、
一人、また一人と、やってくる。振り返る三人。

その「車掌や電車の真似をしてしまう男たち」は、
それぞれ口々に、車掌や電車の真似をしながら電車に乗り込み、真似を続ける。
そしてやがて次のように、残された乗客三人を囲み始める。

男1 (三人に向かつて) ドア閉まります、ご注意ください
男2 (三人に向かつて) 各駅停車、ドア閉まります
男1 (三人に向かつて) プシュー……
男4 (三人に向かつて) 本日はご乗車、まことにありがとうございます
男2 (三人に向かつて) ウイーン……
男4 (三人に向かつて) 電車揺れますのでご注意ください、電車揺れます
男2 (三人に向かつて) ガッタン

全員、一旦、揺らぐ。そして全員、横移動を始める。

男たち ガタンゴトン…ガタンゴトン…
乗客女1 えっ……ちよつと!
乗客男1 待って…、止めて…、え?
男たち ガタンゴトン…ガタンゴトン…
乗客女2 え? これ、どこ行き? どこ行きなの!

そのまま全員、上手奥へ去っていく。彼らの退場と同時に映像。

FILM 『ナン&ピース』

インド音楽とインド人男女による、ヒンズー語のCM。
バックダンサーが踊る前で、デタラメヒンズー語で喋る二人だが、
時折、「チーッラシー♪」「スッシタロー♪」と聞こえる。
そして微妙にインド風なパッケージに変わった「Sushi-Taro」の画像。

ラテン音楽とメキシコ人による、スペイン語のCM。
ラテン美女に囲まれて、黒ぶちの大きな丸メガネを掛けたメキシコ人が、
デタラメスペイン語で喋るが、最後に「ゴッハデスヨ」と聞こえる。
メキシコ風デザインの「Gohan-Desuyo」。

CM終わってニュース。

キャスター ニュースです。

しかしキャスターの下に「〇〇：咲桃くるみ」の文字。
以降、キャスターの声は消え、甲高い女声優の声が当てられる。

キャスター 「政府は今日、あらゆる企業における労働環境の改善を目指し、
全ての職場にジョンとヨーコの設置を義務づけました」

オフィスの端にジョンとヨーコが佇む映像。

キャスター 「これについて、どう思いますか？」と、横に向き直って「お兄ちゃん」

中年男性コメンテーターの下に「〇〇 柚月諒」の文字。イケボが当てられて。

コメンテーター 「そうだね。それはとっても、…いいんじゃないかな」

音楽と共にニュース終わり、駅構内の風景。そこにある「証明写真」ボックス。
近づくとそのそれは「遺影」ボックス。

SCENE 『照明1』

下手から武田の妻、朝子がやって来て、テレビを消して、映像オフ。

朝子 ちょっと早くして。なんか電車が遅れてるみたいよ（椅子を三つ並べつつ）

しかしやって来たのは武田ではない、チヨッキ姿の知らないおじさん。

武田 （声のみ）なんだまたか

朝子 （客席の方にある窓の外を見ながら）もう動いてはいるみたいんだけど…

スーツ姿の武田、下手からやって来る。

武田 そうか？（と、窓の方へ）

武田、窓の前にやって来るが、その武田の前に、チヨッキのおじさんが立つ。
※以降、武田の前には常にチヨッキのおじさんが居て、武田がよく見えない。

朝子 だからあなたも急がないと。今日は大事な商談があるんでしょ（朝食の支度を始める）
武田 ああ、まあでも、昼前からだし

朝子 あ。あと健太、呼んできて

武田 ああ（と、下手の方へ）

健太、ちよっど起きて来る。下手からあくびをしながらやって来る。

そして武田の前に立ったチヨッキのおじさんと、鉢合わせる。

健太 えっ…、誰

朝子 ちょっともう。グズグズしないで。お母さんも時間ないんだから

健太 …誰だよ
朝子 え？ ああ。あれにしたのよ。間接父さん
健太 え？
朝子 ほら、案外目にいいって言うし、部屋がちょっとお洒落になったでしょ？
健太 は？
武田 うん、なんというか、部屋が少し、スタイリッシュにな
朝子 ええ

チヨッキのおじさん、笑顔。

健太 ……。
朝子 さ、これそっち持ってって。早くご飯食べちゃって
健太 ああうん…(チヨッキのおじさんから目が離せないままテーブルへ)
朝子 ほら、あなたも。今日の商談、間に合わなかったらどうするの
武田 ああ、まあ大丈夫だろ
朝子 ほんとにもう

テーブルに向かう健太の後ろに、マグカップを持った加瀬沢部長が、
続いてやって来る。棚の置物などを手に取り、眺める。
テーブルにつく武田。その膝に座り、武田を隠すチヨッキのおじさん。

朝子 毎朝こうなんだからやんなっちゃう。たまには朝からゆっくりお茶でも
武田 (と、テーブルに向かうも、部長の背中を見て悲鳴をあげる)…誰？
加瀬沢 えっ(チヨッキのおじさんの後ろから顔を出して)あ、…部長？
朝子 ……。(無言で振り返る)
武田 あっ…(おじぎ)
加瀬沢 どうして…
武田 有給だ (※加瀬沢部長の声は、やけに囁れている)
加瀬沢 (聞き取れず)……は？
武田 今日、有給だ
朝子 ああ…(なんとか聞き取れるも意味がわからない)
(意味がわからないながらも)……そうですか、いいですね

加瀬沢、うなずくと、以降、棚の置物や写真などを眺め始める。

朝子 (健太に)……さ、ほら、ご飯
健太 ああ、うん…
武田 (健太に) ああ、今日もまた、電車が遅れているみ
健太 ん…？

武田、途切れる。完全に静止する。全員、それを見る。

朝子 …ん？ あなた？
健太 どうしたの？
朝子 あなた、返事して
息子 なに、どうしたの
朝子 (チヨッキのおじさんを手で退かして武田を見る)……やだ。球切れだわ
息子 ……え？
朝子 もう、この忙しい時に。ねえ、替え持ってきて

息子 替え？
武田 (唐突に目を見開きカーツ！と息を吐く)
朝子 ああもう、鬱陶しい
武田 (短くカーツ！)
朝子 (健太に) 早くご飯食べちゃいなさいよー

朝子、下手に替えを取りに行く。
健太、とりあえず朝食を食べる。しかし時折、「カーツ」という武田。

加瀬沢 (時計を見てから) …遅刻するぞ
健太 えっ…(時計を見て) あ、ヤベ(テーブルの上の物を一つ食べてから)
母さん！ 俺、もう行くから

健太、鞆を持って、父を気にしつつも下手に去っていく。

武田 (カーツと言って立ち、歩き出す) 確か寢室のクローゼットに(しかしまた静止)
チヨッキのおじさん、慌てて武田の前に立つ。

武田 (カーツ言って下手に去っていく) 買い置きがあったぞ
朝子 (声のみ) やだちょっと、来ないで！ 鬱陶しい！

チヨッキのおじさん、慌てて武田の後を追って下手へ。

FILM 『じゃくなげ』

再び駅構内の風景。そこにある「じゃくなげ祭り」のポスター。
じゃくなげの花畑をバックに、記念撮影風の中年女性一人。
その幸せそうな中年女性の、笑顔。笑顔。笑顔。あらゆる角度から延々と。

SCENE 『壁』

店員が下手からやって来る。部長はテレビを消し、映像オフ。
勇太と女子高校生二人が、下手から話しながらやって来る。

女子1 電車、もう動いてんのかな、あれ(と、客席側にある窓の外を見る)
女子2 動いてんじゃない？(と、同じく窓の外を見る)
女子1 男子、見えてきてよ
勇太 やだよ、何でだよ
女子2 (窓の外を見て) あ、あれ、勇太じゃない？
女子1 (窓の外を見て) え？あ、ほんとだ
女子2 (窓の外に) 勇太！
女子1 (窓の外に) おーい、勇太ー！
女子2 (窓の外に) 勇太ー！
女子1 (窓の外に) おーい！
勇太 …違うよ、俺ここに居るよ

ほんの少しだけ、勇太と女子1、2が見つめ合う間。

女子2 あれ？ あんた勇太だっけ
勇太 そうだよ
女子1 あ、私、ソーセージマフィン（と言って、歩き出す）
女子2 あ、私、コーラ（と言って、椅子に座る）
女子1 （カウンターに行き、お金を置く）
店員 かしこまりました。少々お待ちくださいませ（一旦、去る）
勇太 ……だよ

勇太、仕方なくそこから離れると、マグカップを持った加瀬沢を見つめる。

勇太 えっ…、父さん？

加瀬沢 お

勇太 ……何してんの？

加瀬沢 今日は有給だ（マグカップを、中のものを攪拌するように、回す）
勇太 は……？

店員 サンキュー（と幕内に言い、商品を持ってカウンターに戻り）お待たせいたしました、こちらこのままで失礼します（商品を渡す）

女子1 （コーラを女子2に渡す）はい

女子2 （それを受け取り）あ。私ちよっと

女子2、後ろの壁に駆け寄り、壁に身を寄せ、撫で、イチャつきだす。

勇太 （女子2の様子を見て）…え。…あれ、何してんの

女子1 （座ってマフィンを食べながら）ああ。こないだ付き合い始めた壁
勇太 え？

女子1 （マフィンを食べながら）あの壁でしょ？ あいつの、今壁
勇太 だって…（再び女子2を見る）

女子2、更にイチャついている。

女子1 （それを見て）あんなん、どうかしてると思うわ（と、ソーセージマフィンを食べる）
勇太 だって…、前はあっちの壁だったじゃん！（と、上手前のパネルを、指差す）

女子1 シーッ！（と、上手前のパネルに気を使いつつ）そう、あれが元壁
勇太 えー、でも（上手パネルを気にして）なんか酷くね？ そういうのってさ

女子1 （遮って）それはいいんだよ
店員 （自分の後ろの壁に密かに言う）んダメ…

勇太 でもそんな、あっちもこっちもって、俺的にはそーゆーのは
女子1 （遮って）いいんだよ（食べ終わってゴミを男子に渡して上手の方へ）

店員 （壁に密かに）んもう…
女子1 （上手前まで辿り着くと、その壁に）ごめん、待った？（そして壁とイチャつく）

勇太 あ…、なんだよ。そういうあれかよ…！（ゴミを後ろに投げる）
店員 ああん！

店員、いつの間にか壁と、大人の濃厚なセックスを始めている。

勇太 （店員の様子に気付き、「わ」となる）

駅のホーム上には、五十嵐と男と中年女性と仏陀が、ぼつぼつとやって来て、ドアの前に並ぶ。駅アナウンスが聞こえてくる。

アナウンス「お待ちいたしました、
二番線、間もなく運転再開となります。間もなく運転再開です」

勇太 (その音で気づき、窓の外を見て) あっ、電車、動くっぽい
女子ら (無視)

勇太 おい女子、電車、動くっぽいんですけど！
女子2 うるさい男子

勇太 (舌打ちしてから) じゃ俺、行くかな
店員 おおう！

店員の絶頂に目を奪われつつも、勇太、下手に去って行く。

女子1 (壁に) うん、じゃ、帰りにまた寄る(と言って、下手に駆け出す)
女子2 (壁に) うん、またラインするから(と言って、下手に駆け出す)
店員 ありがとうございます！

残された加瀬沢、勇太の投げたゴミを拾う。

SCENE 『出勤』

店員は椅子を片付け始める。

加瀬沢 (店員に近づき) 今日はね、私、有給なんです

店員 ……あ、そうですか…

加瀬沢 (ゴミを店員に渡す)

店員 あ、はい…(そして椅子を持って、下手へ去っていく)

アナウンス「整列乗車にご協力ありがとうございます。各駅停車千葉行き、ドア開きます。」

ドアの開く音。ホーム上の人々、電車に乗車。

仏陀は座席に座ると、瞑想を始める。

五十嵐 (ちょうど加瀬沢が目に入り) ……え、部長？ 何してるんですか

加瀬沢 今日は有給だ(マグカップのお茶を飲む)

五十嵐 あ、そうなんですか…(戸惑いながらも座る)

加瀬沢 (五十嵐を見る)

五十嵐 (失った袖など気にして) あ。今日はちょっと、さつき、テロに巻き込まれて…

あ、でも、商談には、間に合いますから

加瀬沢 (無言で五十嵐の肩を叩き、下手に去っていく)

五十嵐 ……？

アナウンス「間もなく二番線、ドアが閉まります。ご注意ください、ドア閉まります」

勇太、とても清楚そうな女、その後から、女子1・2が、駆け込み乗車。

騒ぐ女子ら。空いている席を見つけて座る女。電車の発車音。

全員、一旦、揺らぐ。

女、息を整えると、指を揃えた片手を、掌を前にして、胸の前辺りにかざす。

なんとなく、それを気にする、周りの乗客たち。少しその状態。そして、どうしても気になった隣の中年女性が尋ねる。近くの乗客は、聞くとともになしに、それを聞く。

中年女性 あのだ。それ。なんですか？

女 え？

中年女性 その手。……何、してるんですか？

女 あ。……ちよつどの辺りに、…来るので

中年女性 え？

女 あ。ここに立った人の、……股間が

中年女性 ……あー

女 だから…

中年女性 だから…

女 だってイヤなんです！

車内の人々、反応。仏陀の瞑想、途切れる。電車急ブレーキ音と、アナウンス。

アナウンス「えー、只今お客様が線路に立ち入られたため停車中です」

電車の窓の外に加瀬沢が歩く。駅員が追ってくる。

車内に声は聞こえないが、加瀬沢は「今日な有給だ」と駅員に言っているらしい。

加瀬沢はそのまま去り、駅員が追う。※車内は誰も、加瀬沢に気付かない。

アナウンス「お待たせしました。発車します」

再び発車。いつの間にか、女の手の形、両手で男性器をなぞる形になっており。

中年女性 (それを凝視しており) …あの。それってあの、男性の、その…

女 (両手を凝視したまま) ええ、ちんぽです！おちんぽが目の前に来るのが嫌なんです！

ビクツとする乗客達。仏陀の瞑想、途切れる。中年女性、女から目を逸らす。

FILM『トレインチャンネル』

車両内テレビに、停車駅と次の駅が表示されるが、路線名が、「お食い初め」。

駅名表示は、「赤飯↓吸物↓赤飯↓鯛↓赤飯↓吸物↓煮物↓赤飯↓吸物↓赤飯↓酢物↓赤飯↓吸物↓赤飯↓歯固め(重要表示) ↓赤飯↓吸物」

トレインチャンネルを見ているのは中年女性のみ。「ん？」と、思う。

その後、トレインニュース。文字ニュースが流れる。

「今日、荻窪駅で8時40分頃、女性専用車両内に仕掛けられた爆弾が爆発。

隣接する車両を含む三両が炎上し一時運行がストップしたため、

出勤通学の約一万人に影響が及びましたが、運転は9時05分に再開され、

現在はほぼ通常運行に戻っているということです」

そして、駅構内を歩き交う人々の映像。

「深刻な過疎化により多大な赤字を抱えたJR北海道とJR四国は、

JR東日本への合併が決定されていましたが、合併した途端に

JR東日本の経営も破綻。
そのため本日よりJR東日本は、「峠の釜飯本舗」に、買収されました」
そして、巨大釜飯が線路上を走っていく映像。

それを見て中年女性、思わず立ち上がる。
ポーンと音がして、「この車両は「弱ジェイソン車」です」の文字とアナウンス。

SCENE 『車内』

ジェイソンの仮面の、鼻部分のみを装着した弱ジェイソンが、
15cm物差しを持って、隣車両からやって来る。中年女性、目を逸らす。
弱ジェイソンは乗客を見回すと、近くに立っている勇太の肩を、
物差しで地味に突つく。

勇太 痛っ…
弱ジェイ あ…

弱ジェイソン、勇太に会釈。
そして今度は、近くに座った中年女性を同じく突つく。

中年女性 あ、痛っ…
弱ジェイ あ…

弱ジェイソン、中年女性に会釈。
弱ジェイソンから何となく逃げた勇太、女の前のつり革を掴む。
女は勇太の股間を見て悲鳴。中年女性は慌てて女の目を手で隠す。
すると一旦静まるも、女、直ちにその手を退かしてまた悲鳴。
中年女性は勇太の股間を手で塞ぐが、女はその手を必死で退けようとする。
そこに、下手の隣車両から、しゃもじを持った割烹着姿の女が、やって来る。

割烹着女 (五十嵐を指差して) しいたけ。

乗客ら ?

割烹着女 (女子1・2を指差して) たけのこ。かまぼこ。

乗員ら ?

割烹着女 (仏陀を指差して) ごぼう

乗客ら ?

割烹着女 (女に駆け寄り) うずら。

乗客ら ?

割烹着女 (弱ジェイソンをじっくりと見てから) …鶏肉! (ついでのように勇太に) くり。

乗客ら ?

割烹着女 (うつむく中年女性をよく観察してから) あんず。

乗客ら ……?

割烹着女 (最後に一番離れた席の男のところまで行き) お出汁 (そう言うと、手摺に捕まる)

男 ……あの…なんですか?

割烹着女 (シートと人差し指を口に当ててから) 出汁です

男 え?

割烹着女 あなたは出汁ですから

男 ……なんなんですか

割烹着女 わたしは米です

男 米？
割烹着女 はい

少し間の後、五十嵐、足元に熱を感じる。

五十嵐 熱っ…！

割烹着女 (五十嵐に) 炊かれるんです。私たち

五十嵐 は？

割烹着女 (五十嵐に) 炊かれてください

中年女性 (乗客を見回して) …あ。釜飯？ 釜飯なの？

割烹着女 はい

女 (窓の外を見て) え？…これ、どこに向かっているんですか？

女子2 (窓の外を見て) え？ちよっとなんで？

五十嵐 (窓の外を見て) いやあの、私会社に

勇太 (窓の外を見て) 俺も学校に

割烹着女 峠です

弱ジエイ 峠？

割烹着女 はい

五十嵐、立ち上がって、緊急ドアボタンを押し、ドアを開けようとする。

勇太 あっ、緊急ボタン…(と言いつつ、五十嵐の方へ)

五十嵐 (勇太に) おい、そっち引っ張れ、ドアを開けるぞ

割烹着女 え、これ土鍋なの？(と、辺りを見回す)

中年女性 はい(と言って、五十嵐の座っていた座席に座り、座席下からの熱を仰ぎ始める)

仏陀 やだ、知らなかった

五十嵐と勇太はドアをこじ開けようとし、中年女性と女は、何かに気づく。

女 あっ、ダメ…！

中年女性 あっ、そうよ、しいたけさん、ダメよ開けちゃ…！

五十嵐 おい出汁、手伝ってくれ！ 今日は大変な商談があるんだよ

勇太 おい、たけのこ、かまぼこ、手伝えよ！

中年女性 ねえ！ 炊いてる最中に土鍋開けたら…

女 ええ！ 台無しよ！

弱ジエイソンと、女子1、2、仏陀、顔を見合わせる。

女 とめてお願い、ねえ、出汁、とめて

弱ジエイ おい、くり、やめとこう、な？

勇太 離せよ、鶏肉、あんず！

女子2 くり！ しいたけも、やめなよ

女 しいたけさん！(腕を引っ張る)

五十嵐 うるせえ！(振り返る)

女 (目の前に来た五十嵐の股間に悲鳴)

女子1 (電話をかけており) あ、もしもし？たけのこだけど。こめん今ちよっと炊かれてて、

だから今日会えないかも

中年女性 お願い！ やめて

女子2 やめときなっ！ おい出汁、行けよ！
弱ジエイ 出汁！ 何してんだ、手伝え
中年女性 出汁！
女子2 出汁ったら！
中年女性 出汁！
男 ちょっと待ってください！

間。

男 ……俺、出汁じゃないんで
女子2 えっ…
男 俺、違いますから…

ざわっとする間。

中年女性 ……え、何を言ってるの？ え？ 出汁じゃ、ない？

男 はい、あの。つうか…

全員 (男を見つめる)

男 俺… (全員を見つめ返し) ……シウマイなんです

女 (シヨックで息を飲み) ……崎陽軒！

男 本当にすみません…！ ちょっと、間違えたみたいで… (座席に座り、うなだれる)

仏陀 そんな…

中年女性 ……だって、お出汁なしじゃ

男 ……。

女子3 あ…

女子3は大学生。下手の隣車両からやって来た。全員が、女子3を見る。

女 あっ、じゃあ、あなたが…！ (女子3に駆け寄る)

女子3 え？ 何？

割烹着女 (女子3をじっくりと見てから) ……いえ。グリーンピースです

女子3 は？

女 (女子3を突き飛ばす)

弱ジエイ ……おい、しいたけ。…開けるぞ

五十嵐 え？

弱ジエイ (他の乗客らに) 俺たちは、もうダメだ

女 (泣く)

割烹着女 ……仕方ないですね、開けましょう

女 でも…

中年女性 そうね…、残念だけど、そうするしかないわ…

五十嵐 ……。

ドアを開けようとしな、五十嵐。

勇太 しいたけ、さん？

全員 (五十嵐を見る)

五十嵐 ……私じゃ、…出ませんか

勇太 え…

五十嵐 出汁

女 あっ……！
全員 (同様な驚き) ……………！
仏陀 でも、大事な商談は……
五十嵐 いえ。私の出汁と、鶏肉さん、あなたの旨味で(割烹着女に) なんとかありませんか
ジエイ おまえ……
全員 (同様な思い)
割烹着女 (うなずき) ええ、なると、思います……
全員 (感激。そして口々に歓声)
五十嵐 シウマイ！ おまえも一緒に……
全員 (ザワツとする)
五十嵐 新メニニューだ
男 えっ……(割烹着女に) いいんですか……？
割烹着 (一瞬、躊躇の顔を見せるも、優しい瞳でうなずく)
全員 (更に感激と喝采。喜びを口々に)
五十嵐 (その中で女子3に) おい！グリーンピース！
女子3 (ずっと皆の様子を怪訝な顔で見ていた) ……は？
男 (女子3に駆け寄り) よろしくな！
中年女性 さあ、火をもっと焚いて！ みんな一緒に、炊かれるわよ！

座席の下が赤く滾り、蒸気が噴出し、音楽イン。
足元が熱くなってきて、そのまま、全員、激しく踊り始める。

そうして激しく炊飯中、突如、電車の汽笛と急ブレーキ音で、電車停止。
大きく揺られてから、えっ？と静止する一同。
そして衝撃音で全員、吹っ飛んで暗転。

暗転後、救急車とパトカーのサイレン音が近づく。

FLM『人身事故』

キャスター ニュースです。先ほど、峠に向かって走行中の釜飯に男性が飛び込み、死亡しました。目撃者によりますと、男性はためらうことなく釜飯に飛び込み、そのため土鍋の蓋は、大きく宙を舞い飛び、炊飯中の米と具材は、四方八方に投げ出されたということです。繰り返します。炊飯中の米と具材は四方八方に投げ出され、釜飯は炊き上がらなかつたということです。

アラブ人ADとベトナム人スタッフが、新しい原稿を書きながら持って来る。
そして何故かそのまま居る。キャスターは、それを読み始める。

キャスター えー、この事故により(しかし原稿が読みづらい)釜飯本舗は、鉄道事業から撤退。これを受けてJRは、全ての鉄道事業を、ネット通販最大手企業の、アマゾリ……、アマゾンに、売却しました。
これを機にアマゾソは、鉄道のみならず、日本列島全土を、デソバソー……、デリバリーサービスに使用することを表明。列島全土を車両化することを決めました。

「日本列島、車両化！」の文字。
世界地図上で、発車し、世界を巡って走る、日本列島の様子。

キャスター これにより今後、全ての日本国民は、日本国民ではなく、アマゾソ配達員となります。

大々的に、アマゾンのロゴ。
そしてCM。マンション風の室内納骨堂っぽい映像から。

女性

いつでもどこでも、愛するご家族をお参り出来る、新しい供養のかたち。
宗旨・宗派は、問いません。墓地もお墓もお仏壇も、要りません。
おこころ納骨堂は、あなたの大切なご家族を、あなたの心の中に、納骨します。

胸に手を当てて目を閉じる家族たち。

女性

いつまでも一緒に、いつも間近に。あなたのもとから、徒歩0分。
おこころ納骨堂のおこころ納骨を、是非。

SCENE 『現場』

暗めに明転。救急隊員2人、遺体を乗せた担架に布を被せている。
その横に、加瀬沢のマグカップを持った腕が、転がっている。

救急1

(腕に気付き2に) おいあれ…

救急2

(腕に気付き) ああ…

救急1

酷いな…

救急2

ああ…

救急隊員2、その腕を拾い、その手からマグカップを剥がそつとする。
しかしどうやっても、剥がれない。

救急1

…どうした？

救急2

駄目だ、剥がれない…

なんとなくそつとする二人。

救急1

…ま、いいだる、そのままだ

救急隊員2、腕を担架の上に投げ置き、二人で担架を運んで、上手に去る。

SCENE 『仕事』

ピアノの音がし、照明切り替わり会社内。

まずジョンとヨーコがやって来て、部屋の端で寄り添う。

そして渡井、椅子を三つ持ってきて、並べる。

そこに高羽が、椅子二つを持ってやって来る。

高羽

どうだったよ

渡井

なにが

高羽

電車。今日なんか、酷かったでしょ

渡井

ああ、そういえば？

次長、やって来る。

次長 おお、おはよう
高羽 あ、次長。次長は大丈夫でした？電車
次長 あ？ まあ、いつものことだろう
高羽 そうですか？
次長 で？ 五十嵐くんは？
渡井 あ、まだです
高羽 あ、さっきテロに巻き込まれたとか、連絡ありましたけど
渡井 でももうそろそろ来てなきやおかしい時間だよなあ
次長 なんだしょうがないな。それと、部長は？
渡井 あ。部長は今日は、前から有給を
次長 ああ、そうだったな…。参ったな、部長が居ないと仕事に乱れが出るってのに…
高羽 あの仕事一筋の部長が有給なんて、初めてですよ？ どうしたんでしょう
次長 さあ、知らんよ。そんなことよりほら、今日は大事な商談があるんだから
高羽 あ、はい
次長 で？ 準備は？ 間に合うのか？
渡井 あ、先方への具体的な予算提案書をまとめたので、一応、見てもらえますか
次長 おう

次長、書類を受け取り、見ると、衝動的に、それをいやらしく撫で、
いやらしく接吻等、し始める。

高羽 (高羽に) で？ 昨日作った業務内容資料。それ、どうだった？
渡井 ああ(と、それを手に取り) ……いや、なんかちょっと、いやらしいかも
高羽 え？
渡井 ああなんかもう(目を背けて) ここんとこなんか、ほら、凄くエロいし(渡す)
高羽 あー…、ほんとだ(少々興奮しつつ) やっべ、ちよっと直すわ

次長、いやらしい気持ちを断ち切る。

次長 おい渡井くん、なんだこれは。卑猥過ぎるじゃないか
渡井 えっ、すみません
次長 こんな淫らな…。(渡す)
渡井 (受け取り) すぐに直します(と、書類見ながら席へ)
次長 (股間を抑えるか腰を叩くなどしながら) まったく、もう時間ないんだぞ

しかし渡井、その書類のいやらしさに耐えきれず、思わず鼻息を荒くして、
書類にキス。高羽も同じく、直し中の資料を、愛撫する。永江がやって来る。

永江 おはようございます、すみません、遅れました
次長 (落着こうとネクタイを緩ませながら) ああ、永江くん、来てそうそう悪いが
永江 あっ、お茶ですね
次長 頼むよ

次長、パソコンの電源を入れると、その画面に思わず目が釘付けになる。
渡井、近くにやって来た永江を気にして、股間を隠すなど。

渡井 ああ(自分のパソコンを指し、隣の高羽に) おい高羽、この数字、
高羽 どうしてもいかがわしくなっちゃうんだけど…
え、なにどれ？(渡井のパソコンを覗いて) うっわ…

渡井 ……な？

次長 (パソコンから目が離せないまま) で？ 昨日の会議は？ どうだった

渡井 (パソコンから目が離せないまま) あー、官能的な結果に…

次長 (パソコンから目が離せないまま) やはりか… (とツバを飲む)

次長、お茶です

あと二人とも、先月の売上げが濡れそぼってぬらぬらだったから、もっとしっかり

(と、お茶を口にして驚愕) ああっ 永江くん！淫靡すぎるよ、このお茶、とても卑猥だ！

えっ？ あっ、すみません、煎れ直します

もういいよ、それよりさ、君のこの計算結果… (あまりにいやらしく口に出せず、

モニターを指す)

あっ！ (目を覆う)

ね？ほら、ここんところなんか…ほら…

ああっ (身悶える)

ね？ だから今後、気をつけて

はいっ (と、席へ戻ると、お茶を飲んで悶絶し、舌でお茶を舐め始める)

ああ！なんだろう、どうしても、エロい…

あああ、こんなものを提出したら商談決裂どころか我社の今後に…

ああああ、もう…！ (パソコンが書類に襲いかかる)

あああああ (パソコンが書類を床に押し倒し、覆い被さる)

もう駄目だ。部長に連絡しましょう

(お茶をいやらしく舐めながら) そうね、ここまじゃ

(書類を襲いながら) でも、せっかくの有給なのに

(床に這いつくばりながら) ああ…見積もり、いやらしいよ…、見積もり…

渡井、堪らずズボンを脱ぐ。

そこに下手から、咲田、走り込んでくる。

咲田 大変です…！ 部長が、部長が……！

(ズボンが脱げたまま) え、なに？どうした？

(書類を抱いたまま) ちょっと咲田くん、落ち着きなさい

……今、警察から連絡があって、部長が、加瀬沢部長が、(少し間) ……飛び込みを

長めの間。

次長 ……え？

……飛び込みってまさか

はい、釜飯に

釜飯？

はい、土鍋に

それで、部長は

……

嘘だろ… なんて…

微かに何か音がし始める。

…ん？

…何の音？

部長がいなきや、我が部署は、乱れっぱなしだぞ… (と、書類にキス)

今日の商談、どうしますか…

渡井 ああ、すっぱかすわけにはいかないだろう
高羽 次長、この音は……
次長 え？

火災報知器の音になる。

防災放送 「火事です。火事です。3階で火災が発生しました。落ち着いて避難してください」

永江 3階？（下を見る）

えっ…（下を見る）

高羽 あっ、給湯室…、私、火、かけっぱなしで…？

咲田 えっ、咲田さん？

咲田 だって、まだ誰も来てなかったから慌てて電話に出て、そしたら…

永江 咲田さん！

高羽 次長、とりあえず避難しましょう

次長 ああ、資料や何やら、持って。あっ、あと、開発部の武田くんは、連絡して

永江 あ、武田さん、まだ来てなかったと思いますけど

渡井 （スポンを上げながら）えー？ どーすんだよ、どこで何やってんだよ

高羽 （書類など持ちながら）おい、ジョン、逃げるぞ

全員、存在を忘れていたジョンとヨーコを見る。

ジョン What's happened? What's the matter? Could I have something to do for you?

全員 …。

ヨーコ （ヨーコに向き直り）…Yoko?

ジョン （ジョンに耳打ちを始める）

咲田 どうしよう、ごめんなさい、私…

渡井 今いいから、これ持って

永江 ヨーコも、早く

次長 非常階段の方へ

次長と社員らは書類を持って去り、ジョンとヨーコは手を取り合って、素敵な音楽のなか、ゆっくりと下手に去っていく。

SCENE 『無料』

素敵な音楽のなか、鉄郎と、トランクを持ったメートルがやって来る。
舞台中央まで歩いてきた二人、しばし佇んでから。

メートル 帰ってきたわね…

鉄郎 ああ、長い旅だった…

メートル ええ…。でも鉄郎。これからですよ。あなたの人生という旅は、広い宇宙のもと5周年。

鉄郎 ホクヨの毎日健康便。明日のあなたを作ります。

わかってるよメートル。俺はこれから、実感、蘇る髪質とボリューム。

メートル シースーパリーチ

メートル ええ。強く生きるのですよ…

鉄郎 メートル…！

抱き合う二人。そこに車掌がやって来る。

車掌 ああああ、やはりお二人でしたか！ ご無事だったのですね
メーテル ああ。今なら無料でお見積もり。お引越しなら、タ、ム、ラ
車掌 えっ…？ (鉄郎に) あ、機械の体は、手に入れられたのですか？
鉄郎 ポッポ、ポッポ。ポリッキュー。新・食・感
車掌 えっ…？ ……あの、なにが、あつたんですか？

鉄郎、車掌を見つめたまま、手拍子を始める。

メーテル (車掌に向かって歌へ) I've been expecting you, think it's time to roll.

(語り) いつもでも、あなたと居たかった

(また歌へ) Waiting away from you, baby I wanna know.

(語り) もっと、あなたのことを知りたかった。

車掌 あの……

メーテル (歌) I was real gone, you spun me around

Had a dream it wasn't new, had a dream it wasn't new

I learned from fire, I believed I was alone

Had a dream it wasn't new, had a dream it wasn't new

(※その歌に被せて、手拍子をしながらの語り)

いつも、いつもでも、あなたのそばに。

永遠の命。死なないカラダ。

こんなにも充実したサービスが、すべて無料で受けられます。

そうしてギリギリと車掌に近づいていくメーテルと鉄郎に、
車掌、尻込みしながら尋ねる。

車掌 あのっ、広告は、消せないんですか？

メーテルと鉄郎、歌いながら、語りながら、更にギリギリと車掌に寄っていく。

車掌 広告は、飛ばせないんですか？！

メーテル 機械の体なら、アンドロメダ。そのすべてが、無料です。

そのまま追い詰めていき、三人、去って行く。

SCENE 『タオル』

入れ替わりで加瀬沢夕子がやって来る。

加瀬沢部長と色違いのマグカップを持っている。

続いて武田、やって来る。

夕子 もう大丈夫ですから。お帰りください

武田 いやでも

夕子 さっきはすみません。もう取り乱したりしませんから

武田 いやいいんです

夕子 恥ずかしい。会社の人たちには、言わないでくださいな

武田 言うわけないです

夕子 ……。武田さん。あの、…会社でどうでした？

武田 え？

夕子 様子、とか…
武田 ああ。私は（カーツと息を吐く）加瀬沢部長とは（カカツ）部署がまったく、
違いますから（カツ）
夕子 ああ…（座る）
武田 でも、部長が居なきや部署が回らない（カーツ）会社が回らないってね（カツ）
社長や専務も相変わらずそう、言っていましたから（カカツ）
夕子 そう。会社では変わった様子はなかったのね
武田 はい、多分…

問。

武田 （小さく）あの…、奥さん
夕子 （気付かず）将来有望な開発部の社員で、社の未来はあなたにかかっている、
あの人がよく言っていたわ
武田 （少し笑って）ああ、それは、冗談ですよ
夕子 入社したての頃は、よくウチに来てたわよね
武田 あ、その節はご迷惑を
夕子 いえ、こちらこそ。あの人がたらウチに呼び出してまであなたの開発した製品を事細かに
武田 いや、嬉しかったし、（カーーツ）…楽しかったですよ
夕子 ……。武田さん、本当に何も知らないの？
武田 ……………え？

少しだけ間があって、勇太が帰ってくる。

勇太 ただいま
夕子 （駆け寄り）あんた…大丈夫だったの？怪我は？
勇太 ああ、うん。大丈夫って、連絡行っただろ？（武田に気づき）あ
武田 久しぶりだな、勇太くん…
勇太 ううん、俺、栗だよ
武田 栗？
勇太 （夕子に）今日は行かなくていいって、学校から連絡あった
夕子 …そうね、もちろん、そうよ。少し休みなさい…何も考えずに…（手を肩か頭に）
勇太 （払って）別にいいよ。あ、そうだ。俺、今朝、父さんに会った。駅前の店で。
武田 今日は、有給だったって
……………

夕子 ……………え？
勇太 じゃ。俺、炒られてくるから
夕子 ちよっと待って。お父さん、そこで何をしてたの、何を話したの
勇太 え？（マグカップに気づき）…ああ。それとお揃いのマグカップで、
カフェオレ飲んでたよ
夕子 （マグカップを見る）……………。
勇太 じゃ。俺、炒られてくるよ

夕子、マグカップを見たまま、様子が変わる。勇太、それを感じて立ち止まる。

夕子 …どうして？どうして私には、会いに来てくれなかったの？
武田 （思わず）奥さん？
夕子 （武田に）出張なんてどうせ嘘だったんでしょ？ねえ、そんなに出張ないわよね？
武田 落ち着いてください（夕子のマグカップを取り、勇太に渡す）

夕子 だっておかしいじゃない！ もう一年近くよ、一年近く、ほとんど家に帰らなくなって…
武田 えっ…
夕子 やっぱり、嘘だったのね…、そうに違いないのよ…！ だから私
武田 落ち着いてください…！部長は…

武田、夕子の両肩に手を置く。

すると夕子は下にしゃがみ、夕子2が下手から走ってやって来て、
夕子の背中で倒立前転し、武田の前に現れる。(※以降、夕子⇨夕子1)

夕子2 だから私、問い正したわ。だって、誰だってそうするでしょ？

武田 え？(と言ってから、しゃがんだままの夕子1を見る)

夕子2 本当のことを言っ、って。お願いだから、って。そうしなきゃ、…死んでやるって

武田 (しゃがんだまま無表情で動かない夕子1に) 奥、さん…？

夕子2 だって私、辛かったから…。それでもあの人、なんにも言わなくて…(よるめく)

武田 (思わず支える) あ…

夕子2 結局、なんにも言わなのまま…(武田に) ねえ、やっぱり誰か、居たのかしらね？

武田 誰か、いい女性が…

夕子2 違います！(思わず夕子2の両肩に手をやり) 部長はそんな事は決して

すると夕子2は下にしゃがみ、夕子1、立ち上がり、
素早く夕子2の背中で倒立前転して、武田の前へ。

夕子1 じゃあ、それ以外にいったい何が？

武田 ……え？(と言ってから、勇太を見る)

勇太 ああ。母さんは、ロールタオルに育てられたんだ

武田 ……え？(と言ってから、しゃがんだまま無表情で動かない夕子2を見る)

夕子1 ああ、死んでやるなんて言わなきゃ良かった、私の代わりにあの人、私のせいで…

勇太、スタスタと夕子1の元までやって来て、その両肩を両手で押してみせる。
すると夕子1はしゃがみ、夕子2が立ち上がり、夕子1の背中で倒立前転。

夕子2 言ってくれば良かったのに、死ぬくらいなら言ってくれば…

勇太 (武田に) ね？

武田 (夕子2を見る)

夕子2 あ、すみません。…私、ロールタオルに育てられたんです

武田 あ、はい。さっき聞きました

夕子2 ねえ、私、知りたいの

武田 あの

夕子2 女性でなければ何？

武田 ロールタオルって

夕子2 ああ、公衆トイレの洗面所とかにある、引っ張ると新しい部分が出てくるやつです。

ねえ、それよりあなた、さっきキッパリ言ったわね。違いますって。

何か、知ってるんじゃない？

武田 ああ、あの、タオルがグルグル回る…

夕子2 それはどうでもいいんです！

武田 ……

夕子2 お願い…、教えて…

間。何かを決心する武田。

武田 ……奥さん
夕子2 (武田を見る)
武田 奥さん、本当は、私、……………ジェットタオルに、育てられたんです
夕子2 ……は？
武田 ええ、風で水滴を吹き飛ばす(勇太を見る)
勇太 あ、うん…
武田 申し訳ない！ ジェットタオルの登場のせいで(カーツ)
夕子2 ロールタオルは、すっかり廃れて…(カーツ)
武田 いえ、今はそんなことどうでもいいんです
夕子2 いや、謝らせてください(カーツ)、うちの両ジェットタオルのせいで…
武田 きつと辛い思いを…
夕子2 そんなの、今はどうでもいいんです、今はあの人の
武田 いえ、よくありません！ だって…(と、夕子2の手を取って、夕子らを見つめ)
……………私達、同じ、タオルなんですよ
夕子2 (振り払って)やめてください！ 育ての親は、両ロールタオル共、もう、とっくに…
武田 (後ろから肩を抱き)夕子さん、ごめんなさい…、本当に…
夕子2 あっ…、やめて、あっ…、引っ張らないで、あっ…、回っちゃう
武田 (無表情のまま、夕子2の動きに合わせて何度か立ち上がりそうになる)
夕子2 (夕子2の首筋にカーツ)
夕子2 (その温風に)ああ…(と、よろめく)

小さく音楽。

武田 夕子さん、あなたの涙を、吹き飛ばさせてください
夕子2 武田さん……………
勇太 ……じゃ。俺、炒られてくるよ
夕子2 (勇太を見ずに)ええ、気をつけてね

勇太、下手に去っていく。

武田 そしてどうか私を、拭ってください
夕子2 ええ。いいわ……………

二人、上手の手前に去っていく。
その後ろを、しゃがんだままの夕子1、着いていく。

SCENE 『JR』

音楽カットアウトし、映像に「JR東日本」のロゴ。
渡井、しいたけを持って、下手からやって来る。
その後ろから、咲田、着いて来る。

咲田 ねえ、武田さんは
渡井 居ないもんはしょうがないだろう
咲田 だって、プレゼン、どうするんですか
渡井 なんとかするよ。(と、一歩進んで)失礼します。

とても小さくジャズが流れる。

渡井 ミナモト商会の、渡井と、五十嵐です(と、しいたけを掲げる)
すみません、どなたかいらっしやいますか…?

(真つ赤な口紅で煙草を啜えてやって来て)…なに?

渡井 あ、私、ミナモト商会の車両設備部品営業担当の、渡井と(と、しいたけを)
翔子 え? しゃ、りよ、う?

渡井 あ、はい。今日は我が社の開発部が新たに開発した設備を…。咲田さん、資料
咲田 はい(鞆から資料を出して)こちらがその資料になります(目で奥に人を探しながら)
翔子 ちよっと、いやらしいんですが、ぜひこちらをご確認いただいで…

(資料の上に煙草の灰を落とす)

あつ…! (と慌てて火の粉を振り払う)

(笑って) ああごめんなさい、だって興味ないし

咲田 酷くないですか? そりゃ、ウチは競合に負け続けてきましたけど、でもこうして

渡井 (咲田を退かして) お願いです、我が社は車両開発に、全精力を注いで来たんです。

それに…

翔子 それ、に?

渡井 (咲田を気にしつつ)…本社ビルが、全焼しました。

我が社に残されたのは、その製品の開発資料だけです、あとはみんな…

咲田 (資料を見ながら)…これは部長が、加瀬沢部長が、すごく、力を入れて…

渡井 (その資料を奪って)ともかく、これを責任者の方に見せてください

翔子 (受け取って)…分かったわ。見せはするけど、その、しゃりよう、つての?

渡井 うちに必要あるかしら…

え?

電話が鳴る。

翔子 (電話を取って) はい、ジャズバー・ルージユ東日本です。ああ、ジョニーさん。

ええ、大丈夫。ちゃんと楽器は届いてるわ。え?…やだ、私は歌わないわよ。

歌はもう、やめたの

千夜、真つ赤な口紅でカクテルを持って上手前からやって来る。

渡井 え…?

咲田 ジャズバー…?

翔子 ええ(受話器を置いて千夜に) あ、チヨコラちゃん、あなたまた歌ってあげてね

千夜 えー? だってジョニーさん、シヨコラさんに歌って欲しいんだからー

翔子 私は歌うためにここに来たんじゃないの

渡井 でもあの、ここって、JR東日本の…

翔子 ええ。ジャズバー・ルージユ、東日本よ

咲田 え? じゃあ車両は…

翔子 ここにはジャズのビートと、ほんの少しのお酒しかないわ

千夜 やだ、シヨコラさん毎晩酔っ払ってる癖に

翔子 私はジャズのリハモに酔ってんのよ。ルートはCメジャーから、モードはリズムに

千夜 寄り添って、リハモナイズで私は充分

すでに岡部、グラスを持って、佇んでいる。

岡部 …お。珍しいお客さんだね

渡井 あ。岡部社長…!

岡部 うん。久しぶりだね。何か飲むかな
咲田 (飲みたそう) あ…
渡井 (咲田を制して) いえあの。JRの、車両開発部は…
岡部 あ。車両のスピーカー、気づいてくれてたかな
渡井 え？
岡部 音質、かなり良くなったる？(嬉しそうに笑って酒を飲み)
あと、走行中のビートの刻みも…

岡部、走行音のビートを口で刻む。千夜も共に刻む。

渡井 あの、社長？ 社長！
岡部 うん。何より大事なものは、即興性と、変速性ね？
咲田 ?
岡部 うん。如何に時刻表から自由になれるかが大事だし。フィーリングに委ねて、んー、決まったルートで、走らないわけね。それがフュージョン(そしてまた酒を飲む)
渡井 あ(気づき)…それで、遅延が増えたり、停車駅を飛ばしたり、走行中に、しょっちゅう停車を…
岡部 そう。それがジャズのセンシティブティ

少し間。

岡部 ……でもね。今後は、この店一本で、やって行けるようになったから(部屋を見渡す)
渡井 そのせいで、事故や、人身事故も増えて…
岡部 ああそうね、ホームドアなんて全然ジャジーじゃないからね
渡井 ……
岡部 やっとだよ。このためにやってきたんだよ僕は。そして、鉄道事業を売却したお金で、伝説の歌姫、シヨコラを雇うことが出来た。僕は、そのために…
渡井 売却？
岡部 ああそうさ
渡井 (まさか) そのために、…社長になったんですか
岡部 (もちろん) ああ、そのめだけに
渡井 (まさか) 鉄道なんて、…どうでもよかったですか
岡部 (もちろん) ああ、そうね
咲田 でも、シヨコラさん歌わないって…！
岡部 (突如声を荒げる) いいんだよ！ いいんだ…
翔子 (咲田に) 私の名前は翔子。もうシヨコラじゃないのよ
岡部 (翔子を見て、微笑む)
渡井 あなたのせいじゃないですか…、我が社の赤字も、加瀬沢部長の…

突如、防災放送的なサイレンが鳴り、防災放送アナウンスが聞こえてくる。

防災アナウンス 「この度はご乗車誠に、有難うございます。日本列島、まもなく発車いたします。お立ちの方はお近くの手すりやつり革におつかまりください。
日本列島、発車します」

響く発車ベル。地面が動き、全員が同じ方向に一瞬揺らぐ。

※この間、一同、アナウンスを聞くが、渡井は岡部を睨んだまま。

岡部 (小さく) よし…

そこに、白衣の伊沢が駆け込んでくる。
※以降、走行音の鳴るなかで。

伊沢
渡井さん！

（伊沢を見て）あ

伊沢
（咲田に）開発部の伊沢です。武田さんは…

咲田
ああ、なんか連絡がつかなくて

伊沢
そうですか（密かにほっとする）

渡井
（しいたけを放り投げ、岡部に掴みかかる）

岡部
あ、ちよっと…

咲田
五十嵐さん…！（しいたけに駆け寄る）

渡井
あんたのせいで…！

渡井と岡部、揉み合いになる。

「ちよっと！」「渡井さん！」「マスター！」等、それぞれ口々に。

そして渡井、岡部を突き飛ばし、渡井が岡部に殴りかかるのか？という、緊張感。
しかし渡井から出たのは、手ではなく、舌。その舌で、岡部の耳を舐め始める。

岡部
あつ、なんで、耳を、ちよっとやめて

渡井
（怒り激しく）あんたのせいで！（優しいキス）

岡部
（怒り激しく）俺たちは！（優しいキス）

渡井
（怒り激しく）部長も！（優しいキス）

（渡会を引き剥がし）ああもう、さっきから、加瀬沢くんがいたい、どうしたんだい
あんたのせいで…！（ベルトを外すかチャックを下げる）
渡井さん！

咲田、しいたけを放り投げて、渡井に濃厚なキス。

そしてそのまま、渡井をやたらまさぐり、やがて押し倒す。

※以降、咲田と渡井、部屋の隅で静かにイチヤイチャ。

シヨニーさんがやって来て一旦裏に行く。

伊沢が意を決して岡部のもとに歩み出る。

伊沢
…あの。開発部の伊沢です。今日はこちらの資料をご覧いただきたく…

岡部
…ん？ これは？（翔子が落とした資料を見つける）

翔子
ああ、それはさっき

伊沢
申し訳ありません、それは手違いです。こちらの資料を

岡部
（遮って）あ…。これは、あれだね？ 武田くん…

伊沢
ええ、そうなんです。ちよっと手違いがありました…

伊沢、その資料を強引に奪おうとするが、岡部、更に強引に奪い返す。

岡部
ああいや。加瀬沢くんから聞いてたよ。いや。遂に出来たんだね…

伊沢
え…？

岡部
素晴らしい！

伊沢
いえ！ ダメです。そっちじゃなくてこっちを

岡部
（伊沢の資料を返けて）でも、ウチでもジャズバー・ルビー西日本でも、
ジャズバー・ルパン東海でも、うん。すべてのグループで、もう必要ないから
え？

岡部　でも安心して。売却先に、紹介したげるよ
伊沢　…ジャズバー？

ジャズ曲の前奏が流れる。岡部は電話の方へ向かう。
ジヨニーは楽器（鈴）を既に持って戻って来ており、鈴を演奏し始める。
千夜はマイク前に立って歌おうとするが、翔子、それを邪魔するよつに、
ビートに身を委ね、激しく髪振り乱して、踊り始める。
呆気にとられてそれを眺める伊沢。咲田と渡井もそれを見る。

千夜　ねえシヨコラさん、ほんとは歌いたいでしょ？

翔子　Eey... (踊り続ける)

千夜　ねえシヨコラさん、歌ってよ！

翔子　Yeah... (踊り続ける)

岡部　あーもしもし、私だけだね。紹介したいものがあるんだ。うん

伊沢　あつ、ちよっと（岡部を止めようとする）

翔子　（踊り続けつつ、マイクに近づく）

咲田　あつ、シヨコラさんが歌う（伊沢を引き止める）

翔子　（マイクから離れていく）

咲田　ああ…

伊沢　（咲田に）ちよっと離して

翔子　（またマイクに近づく）

咲田　（伊沢に）あ、歌う歌う

伊沢　（咲田に）離してってば

岡部　じゃ。今すぐ、そちらに向かいますから。よろしくどうぞー
伊沢　（岡部に向かって叫ぶ）ああ、駄目ー！

翔子、またマイクから離れ、咲田、落胆。音楽大きくなり、暗転。

FILM 『設置』

キャスター　ニュースです。車両設備部品を専門に扱ってきたミナモト商会ですが、
先程その本社ビルが全焼し、男女一名つつが焼死体で見つかりました。

シヨンとヨーコの写真か音楽、一瞬…

キャスター　ミナモト商会は長きに渡り鉄道車両の設備部品の開発と製造を担ってききましたが、
ここ十年ほどはジャズマニアに人気の音響機器メーカー「ジャイブ」に
その座を奪われており経営は悪化。

更にこの度の火災の影響で経営破綻に追い込まれる恐れがありました。が、
只今、そのミナモト商会の、新たな設備部品の採用が、決まりました。

原稿を置いてカメラ目線で。

キャスター　ただいま、その設置のため、列島は少々停車中です。

CM。土、砂、砂利、アスファルトの、映像。

女　いつもあなたの足元に…。

「地面」の文字と地面の画像、浮かび上がる。

女 踏む。蹴る。転がる。倒れ込む。
這う。掘る。埋める。痰を吐く。

その行動をする女性タレントの映像。

女 あなたのニーズに答えます。あなたの足にもきつとフィット！

「地面」の文字と地面の画像、浮かび上がる。

SCENE 『総務』

明転すると、渡井と咲田。座席に座っている。

渡井 あの社長、許せねえ

咲田 今はマスターです

渡井 え？ ああ

咲田 でも、うちの設備、売却先のアマゾンに紹介してくれるって

渡井 そんなの

咲田 でも、もし決まったら、その方が前よりも大規模に

渡井 …。

咲田 そしたら、社の再建どころか……

咲田、ワクワクする。そこに、ゴージャスな髪型で煌びやかな装飾品をつけた、スーツ姿のおじさん二人、やって来る。出来れば顔や胸元にラメ。

兄 その君ね。許すということも大事だよ

弟 何故ならそれは、自分を解き放つことだからね

兄 だからヘブンリーでアメージングな君になればいい

弟 そしてプレシヤス&ファビュラスな人生を

兄 それが世界の望む、君だからね

渡井 ……は？

モデル風の男（小林）、やって来る。オールバックか金髪。

咲田 （小林を見て）あ……

弟 あ、肩に埃が（と兄の肩をはらう）

兄 ありがとう、美樹くん

弟 いいえ、恭吾お兄様

咲田 叶係長

渡井 え？

咲田 総務課の、叶恭吾係長と、叶美樹係長補佐

渡井 は？

兄 本当は兄弟じゃないんだけどね

弟 お兄様！

兄 あっ失礼…（直ちに取乱すか落ち込む）

小林 （素早く兄にシャンパンを注ぐ）

兄 （素早く受け取り飲み）ありがとう、気の利く男だな

渡井 あれは？
畠田 ああ、総務課の小林さん
弟 (シートと口に指を当てて畠田に) グッドルッキングガイだ
畠田 ああ。グッドルッキング小林さん
弟 (畠田を睨む)
男 (渡井に普通に会釈) 小林ですー
兄 (男にいきなり殴りかかる)
渡井 (思わず止めて) あっ！ちよっと、何するんですか、やめてください！
兄 (しかし収まらず) 小林とか言ってるじゃねえぞ
弟 お兄様！ 恭吾お兄様！

弟に間に入られ、兄、落ち着く。

小林 すみませんでした、思わず…！
渡井 なんなんですか…
兄 私たちは、そりゃ、本当の兄弟ではないよ…。しかし、社員たちの夢と希望のために…
弟 お兄様…
兄 ずっとこんな…、ファンタジーを… (唇を噛む)
弟 お兄様…
兄 (渡井と畠田に) …すまない。でも大丈夫。我が社は。これまでも。これからも…
弟 ええ、今まで通り…
兄 ああ、今まで通り、ゴージャスで、マーベラスな、備品を！
小林 (泣きそうになりながら笑顔を作る)
弟 はい、ファビュラスな、クリアファイルや付箋や、ホチキスを！ (同じく泣き笑顔)
兄 ええ、ヘブンリーでドリーミーな、パーティションや、ゴミ箱を！ (同じく泣き笑顔)
渡井 だから安心して…
兄 でも、全部燃えましたよ
弟 (失神する)
小林 (渡井の頬を平手打ち)
弟 (駆け寄り) 係長！
兄 (小林を押しつけ駆け寄り) お兄様、恭吾お兄様！

兄、なんとか正気を取り戻すが、ゴージャスなカツラが落ちてしまっている。

兄 (渡井と畠田に笑顔を作って) ……でも。私たちは、セレブだから…
渡井 でも備品も全部…
畠田 (渡井の頬を平手打ち)
渡井 (驚き) ……畠田さん？
畠田 大丈夫って言ってるじゃないですか！

兄、この間に落ちたカツラに気づき、いそいそと装着する。

畠田 小林：ううん、グッドルッキングガイさん
小林 (ハッとする)
畠田 美樹さん
弟 (ハッとする)
畠田 恭吾さん
兄 (ハッとする)
畠田 私、セロハンテープが欲しいです！

衝撃を受ける三人。華々しい音楽イン。

小林 yes,majami

弟 そうこなくっちゃ!

兄 着いてらっしゃい! 世界に二つとない、プレシヤスなセロハンテープを差し上げるから
咲田 ありがとうございます!

歩き出す四人。

咲田 ほら、渡井さんも

渡井 え? ああ...

ゴージヤスな音楽と共に四人、上手前に去っていく。
渡井も去ろうとするが、下手から健太がやって来る。

SCENE 『ヤナー』

健太 ただいまー(渡井と目が合う) …え?

渡井 え?

健太 ここ、うちじゃない?

渡井 は?

健太 あれ?

渡井 ああ、もう列島全部が電車だからね

健太 …え?

渡井 列島の全部が、車内だからね

健太 はあ…そうなん、ですか…

渡井、去っていく。

健太 …おい、入れよ

勇太 (やって来る) なあ。俺、炒られに行かなきゃいけないんだけど

健太 なあおい…、お前、しっかりしろよ

勇太 別に平気だよ

健太 …ほんとに?

勇太 ああ。だからやっぱ行くよ

健太 いや、ちょっと待って。ちょっと話そう

健太、座席に座ろうとするが、大きな鞆を持った女が来て、その座席に座る。

健太 え、誰?

女 は?

勇太 (シーン「照明」で部長が見ていた棚の置物などを見に行く)

健太 いやあの…

女 なんですか?

健太 ……あ、いえ。じゃ、こっちに

健太、別の座席に座ろうとするが、男が来て、健太を突き飛ばして座る。

健太 え？

勇太 (棚に置物を戻し) 俺、もう行くよ？

健太 いや、ちょっと待って。お前の父さん、うちに来たんだよ

勇太 ……え？

健太 今朝。そこに…(棚の辺りを指す)

勇太 なにに…？(思わずそこから退く)

健太 さあ…

勇太 ……

健太 だから、うちの父さんと、なんかあったのかなあって

勇太 ……なんだよそれ。は？ 知らねえよ、そんな

勇太、座席に座ろうとするが、中年男性が来て、勇太を突き飛ばして座る。

勇太 え？ 誰？

健太 なんかさ、言ったりした？ 会社のこととか、仕事のこととか

勇太 は？

健太 ここんとこさ、うちの父さんも元気がなくて、変なんだよ…

勇太 知らねえって、そんなん…

女は化粧を始め、男は電話をし始め、中年男はワンカップを飲み始めている。

健太 でもさ、何か原因が

勇太 原因なんか、どうでもいいよ

男 (電話で) えー？じゃあ何食べ行っちゃうー？ (※以降、電話を続ける)

健太 どうでもいいってことないだろ？ (※以降、騒がしくなる分、自然と声が大きくなる)

勇太 どうでもいいんだよ！あんなやつ (※以降、騒がしくなる分、自然と声が大きくなる)

健太 勇太？

中年男 (男に) おい、うるせーぞ

勇太 仕事ばっかでるくに帰って来ねえし、話だってもう何年も

健太 勇太

中年男 (男に) おい、電話やめろ。迷惑なんだよ

女 (中年男に押され) ちょっとやめてよ、あんたの方が迷惑なんですけど

勇太 だから死んだって構わねえんだよ！

健太 そんな言い方ないだろう！(思わず勇太の胸ぐらを掴む)

防災アナウンス「お待ちせしました。発車します」

発車音と共に、一同、一瞬揺れる。

※以降、走行音の鳴るなかで。勇太は、俯いたままで。

男 (電話に) いや、なんか変なジジイがいてー

健太 仕事だって、お前のためだろ？

女 お酒臭いの迷惑なんですけどー

健太 家族の、ためだろ？

中年男 お前だって化粧なんかしてんじゃねえよ！

勇太 (健太の手を振りほどく)

健太 いい人だったじゃん！

男 迷惑ジジイはどっか行けよ！

健太 優しく、頼れる人で…

男 お前もさつきから臭せんだよ（と、女から化粧道具を取り上げる）
健太 お前もほんとは、好きだったろ？
女 ちょっとやめてよ！（立ち上がる）
健太 だからなんだろ？
中年男 電話を切れよ！（立ち上がる）
男 やめるよ、しつけない！（中年男を女の方に突き飛ばす）
女 ちょっと、触らないでよ！（中年男を健太の方に突き飛ばす）
男 黙れブス！
健太 だからさ、寂しかったんだろ？（中年男に抱きつかれながら）
女 うるせえ包茎！
健太 だからさ、辛かったんだろ？（中年男に抱きつかれながら）
中年男 ハゲの方が臭えだろが！
健太 はあー？
中年男 だからさ（中年男に放られる）…ちよっと！ やめてください
男 うるせえ童貞
健太 （静止して）…は？
男 なに？
健太 …クソ底辺に言われたくないんですけど
男 は？ 何言ってるの？ お前死ね、童貞のまま死ね
女 童貞、短小、早漏は、皆んな死ねよ
中年男 うるせー、雌豚！売女！
男 どけよデブス！離せチンカス！
健太 （三人に掴みかかっていく）この、ゴミークズーオンナ！

そうして収拾のつかない喧嘩になり、電車ブレーキ音。再びアナウンス。

防災アナウンス「えー。ただいま車内トラブルのため一時停車しております」

駅員たち、無言で四人を車外の手奥に連れて行く。
口々に文句を言う男と女と中年男。

男 あーあー、分かったよ！降りてやるよ
女 触らないでってば
中年男 はいはい、降りりーるーよー
健太 あ、降りるって、どこへ？（引っ張られ）だって、ちよっと
（幕内の奥を見て）…え？ ……海？

波の音。

勇太 ……じゃ。俺、炒られてくるよ

SCENE 『O>』

下手に去っていく勇太と入れ替わりで、
伊沢が図面と缶コーヒを持ってやって来て、座席に座る。
先程の駅員二人、車外から戻ってくる。

伊沢 「…あ、駅員さん！ 大変なんです」
駅員1 「なんだい、どうした」

それに気づいた声の人達、こそこそと離れて、以降、台本のみを見て続ける。
駅員たちは伊沢を取り囲み、声に合わせて動く。

駅員1 「さあ、一緒に行こう！」

伊沢 「いやあー！」

駅員2 「おうい、どこへ行くんってんだ！一緒に報告を！」

伊沢 「だあって……！」

駅員1 「さあ、行こうう！」

伊沢 「離してええええ……！」

ブザー音。音響監督が台本片手に溜息をついてやって来て、声の三人の前に。

音響監督

…あのさ。んー臨場感？ そんなんじゃさ、伝わんないよ？

もっとさ、心をさ、声に乗せていこうよ（男に）おい涼森、聞いてんのか？

（女に）ねえ森ちゃん（中年男だか女に）ねえ…（しかし叱れず）お願いしますよ

音響監督が去ると、再びブザー音。

心を声に乗せた声の演技を、これでもかと最大限に披露する三人。

伊沢は缶コーヒーを振り回して、駅員たちと揉み合う。

すると、ダンディな男がどこからともなく現れ、駅員、伊沢から手を離す。

駅員2 「え、誰？」

ポッカ お嬢さん、あんまり乱暴に扱わないでくれ

駅員1 「え？」

駅員2、伊沢の持っている缶コーヒーと男を見比べる。その缶コーヒーはポッカ。

駅員2 「あ。…ポッカ？ ポッカの男！」

男は、そこに描かれた笑顔と同じ笑顔を見させている。

伊沢 「いやー！」（と、悲鳴をあげて上手前に走り去る）

駅員1 「あつ、なんだいおい！ 待ってくれよ！」

駅員1、2、伊沢を追って、上手前に去る。

声の人達、声の演技に夢中でしばしそれに気付かないが、

やがて気づいて、後から追つ。

その後少しして、音響監督も、追って通過。

SCENE 『4-1』

防災アナウンス 「お待ちせしました、発車します」

そこに健太が、上手奥から走ってやって来て、なんとか車内に乗り込む。

ドアが閉まる音と、発車音。ポッカの男、揺らぐ。

健太 勇太！ 勇太…！（男を見て）え、誰？

ポッカ さあ？

健太 （歩き回って）母さん？ どこ行ったの？

ポツカ どうした大丈夫か、そんなに息を切らして
触んなよ、誰なんだよー

健太 さあ。特にモデルは、居ないんだ

ポツカ は？

ポツカ 私に、特にモデルは居ないんだ。だから自分でも、自分が誰なのか、
わからないんだよ…(悲しい笑顔)

健太 (何を言っているのかわからないが) ああ、そう

ポツカ まあ座りなさい。だいぶ疲れているようだ

健太 ああ…(座って思い出し) あ、俺と同じくらいの奴、見なかった？ 男子
ポツカ ん？

健太 さっきまでここに居ただけ…

ポツカ ああ、今は国中どこも電車内だからな。その子も、君の母親も、
多分、別の車両に居るんだろう

健太 え？

ポツカ だからその内、会えるよ(爽やかな笑顔)
健太 (釈然としないが) …ああ、うん

そこに下手から、甘栗が一つ、飛んで来る。

ポツカ …ん？ 甘栗？(それを拾う)

健太 …うん、まあ。戻ってきて、くれるよね…

ポツカ ああ。(バキッと甘栗の皮を割り) その子とは、仲がいいのか？
健太 え？ ああ、まあ、そこそこ？

ポツカ そうか(と、甘栗を口に放り込み、座る)

健太 近所だし。父さん同士が同じ会社で。まあ。小さい頃から？
ポツカ そうか(咀嚼)

健太 だから電車でさ、よくプールとか連れてってもらってたさ
ポツカ ん？

健太 あ、あっちの父さんに

少し間。電車の走行音、小さく聞こえ始める。

健太 俺たち、電車が好きだったから。わざわざ何個も、電車乗り継いでさ
ポツカ そうか

照明、少しずつ、ムードあるものに変わっていく。

健太 うちの父さん、研究室にこもりっぱなしで、あんまり遊びに連れてってくれなかったから
ポツカ うん？

健太 ああ。車両設備をいろいろ開発してるって自慢してたけど、でも俺、知ってたんだ、
全然それが採用されなくて、会社でも多分、居場所がなくて…

ポツカ そうなのか
健太 だから…。変な話、うちの父さんだったらわかるんだ、でも、なんであの、
勇太の父さんが…

照明はムーディーなものになり、ムード歌謡の前奏が、小さく流れ始める。

ポツカ ……ん？
健太 勇太、大丈夫かな…

ポツカ 座席の下から…
健太 勇太、やっぱ探さなきゃ…(立ち上がるうとする)
ポツカ (それを引き止めて) 待て。座席の下から、ムーディーな雰囲気が出てきているぞ
健太 ん？

座席の下を覗き込むポツカの男。

ポツカ ほら。温風じゃなくて、ムードが…
健太 なに？(座席の下を覗き込む)

前奏の終わり同時にスナックの女、京子と、客の中年男性、茂(しげ)ちゃんが
いそいそと上手前からやって来て、デュエットし始める。ミラーボールが回る。

健太 (それを見たまま) これ、父さんの、好きな曲だ…

ポツカ え…？

健太 え…？(座席の下や座席を見て) じゃあ。これ、父さんの…？

ポツカ ……？

健太 うそ…、やったじゃん…！ 父さん！ 父さん！(と、下手に走って去る)

ポツカ あ、おい、靴。靴、忘れてるぞ！(と、健太を追って去る)

デュエットは続き、一番を歌い終わる。

SCENE 『欠陥1』

間奏が流れるなか、渡井と咲田と伊沢、上手前からやって来る。

咲田はきらびやかなセロハンテープで修復した書類を持っている。

伊沢 ありがとうございます、助かりました…

咲田 ううん、ちょうどセロハンテープあったから(と、書類を見せる)

伊沢 え？ …ああ。ありがとうございます

咲田 で、これ、なんなの？

伊沢 昔の図面です。うちの設備部品が使われていた頃の。これを何とか、

あの図面とすり替えられたら…

渡井 いや、もう遅いだよ

咲田 そうよ伊沢さん、もうちどっちだっていいじゃない

伊沢 でも、大変なことになるんです…！

渡井 もういいよ、どうなっても…

間奏が終わり、デュエットは二番に入る。

伊沢 (歌う二人を見て) あ…

咲田 (歌う二人を見て) え、なにあれ

伊沢 (急いで座席下をまさぐり、スイッチをオフにする)

音楽、消える。

京子 じゃ、茂ちゃん、今夜はここまで

茂 えー？京子ちゃん、明日は？明日もいる？

京子 さあどうかなー？

茂 えー？いるでしょ？茂ちゃん、待っててくれるでしょ？
京子 さあねー

など、女と中年男、ごちゃごちゃ言いながら上手前に去っていく。

伊沢 え？何？

伊沢 (二人の去った方を見つめて) もう、全ての設置が済んだんだ…
伊沢 なんなの？

伊沢 新機能です。でも、こんなのはいいんです

伊沢 え…？ 新機能？ どんな新機能？ (二人を見に行き、一旦去る)

少し間。伊沢が座席に座り、渡井もその隣に座る。

伊沢 ……。

伊沢 ……で。なんなの？ その欠陥って

伊沢 ……。

伊沢 教えてくれないとわかんないよ

伊沢 ……つり革です

伊沢 ……え？

伊沢 つり革が、(少し間) ……意思を持つんです

伊沢 え？ ……意思？

伊沢 ……はい

伊沢 ……つり革が？ (つり革を見る)

伊沢 はい…、全ての車両の、つり革というつり革が…、それぞれに、自意識と感情と、

伊沢 個性や承認欲求を……

伊沢 え…？

伊沢 もう、持ってます

伊沢 (思わず小さくビクツとして) えっでも… (と、つり革を指さそうとする)

伊沢 (慌ててその手を止めて) だめ、やめて…

伊沢 (つり革を触るうとする) でもさ

伊沢 (慌ててそれを止めて) やめて

渡井 渡井と伊沢、手を取り合っているか抱き合っている形で揉み合う。

伊沢 伊沢、戻って来て、それを見て、興奮する。

伊沢 あっやだ！ なに？ なにがあったの？ え？

伊沢 あーいや…

伊沢 なになに？ どうしたのー？ (と、つり革に掴まる)

伊沢 あっ！ やめてっ、早く離して…

伊沢 え？

伊沢 お願ひ！ 大変なことになっちゃう！

ドイツルの音が響く。静まり、音の方を見る三人。

大勢のシユプレヒコールが、近づいて来る。

女1 権利を守れ！

全員 権利を守れ！

女1 自由を守れ！

全員 自由を守れ！

拳を振り上げ、つり革のイラストを描いたプラカードを掲げたデモ隊の男女、
下手と上手前からやって来て、三人を取り囲む。
少し間。

男1 (唐突に) やめるー！ (咲田にタックルする)
咲田 (倒れて) …えっ、なに？

彼らの権利と自由を、蹂躪するのはやめなさい
彼らの気持ちをあんな、考えたことはないのか
男2 どうして今あんな、そんな風に突然、彼を握って
男1 え

咲田 待って。彼女、無自覚なんです。だからこそ、意識改革が必要なんです
女1 …は？

あなた、知らない人にいきなり握られたら、どう？ さも当たり前のように、
咲田 (咲田を握り) こんな風に、(咲田を握り) こんな風に、握られたら

咲田 (振り払って) はあ？ なんの話？ (と言つと、またつり革に近づく)
男2 おい、あんなまた…

伊沢 ちよっと咲田さん (咲田を止めようとする)
咲田 (それを振り払う)
咲田さん…！ (咲田を止めようとする)
渡井 (それを振り払う)

咲田 まさか、あんなまた…
男1 だから、何の話かちゃんと教えてくださいよ。でないと…

咲田、これ見よがしにつり革に掴まる。男女、悲鳴か怒りの声をあげる。
女2、スマホで咲田を撮影し、直ちにSNSに投稿する。

伊沢、唐突に、首が180度回るほどの勢いで、咲田を拳でぶん殴る。

伊沢 このクズ野郎！

男女ら ……！ (驚く)
渡井 ……えっ、伊沢さん？

伊沢 確かに！ 彼らはつり革である以上、握られること自体が嫌というわけではない。
しかし、だからと言って、いつでも誰にでも握られて良いということでは、決していない！
彼らには、意思があるのだ…

渡井 ……伊沢さん？
女1 ……あなた、今の言葉、その通りよ (と伊沢に近づく)

伊沢 (女1の顔に唾を吐く)
男女ら (慄く)

伊沢 デモなんて生ぬるい。彼らの権利を守らないと (男1に) 解放戦線を！
渡井 えっ… (戸惑って他の仲間を見る)

男1 ちよっと伊沢さん…
伊沢 (男2に) 全国的に支部を作り、早急に、殺傷力の高い武器の調達を！
渡井 えっ… (戸惑って他の仲間を見る)

伊沢 ちよっと伊沢さん… (と、伊沢の手を取る)
渡井 (その手にすがって) ああもう、どうしよう…、こんな、危険で恐ろしいことに…
え？

伊沢 一般市民をも巻き込んで、多くの血を流すことになるわ…
渡井 ……ち？
伊沢 どうしよう…、やっぱり、大変なことになっちゃった… (頷れる)

渡井 いや……

伊沢 (頼れたまま女2に) あ、あと、諸外国政府やメディアにも訴えて、国際的に賛同者を増やすのよ

渡井 いやあの。伊沢さんが、大変なことに(してるんじゃない?) ねえ(と男女らを見る)
男女ら ……。 (なんとなくなずく)

伊沢 だって、全国の、全車両の、全つり革が、意思を持ってしまったんだから…! (震える)

渡井、つり革を見上げ、こっそりとつり革をつついてみたりする。

女1、平伏しながら伊沢の元に、にじり出る。

女1 今からあなたがリーダーです。彼らの自由と権利のために私たち、何でもします。どうか更なるご指示を

伊沢 まずは声明を出しましょう(と、冷静に立ち上がり、歩きながら) その前に、部署の責任者を決めて組織化を綿密に

とりあえず伊沢と女1に着いていく男女ら。

渡井 あっ、ちょっと待って。重大な欠陥って、…これだけ?

伊沢 ああ、あと、この車両が移動する分だけ、あなた方がスタイリッシュになっていきます
渡井 えっ…? 行きましょう

伊沢

伊沢と男女ら、上手前に去っていく。

電車の軋む音がして、渡井、揺らいで思わずつり革を握ってしまい、少し謝る。

SCENE 『R』

喪服を着て、青いバケツを持った加瀬沢の兄、上手前からやって来る。

渡井 咲田さん、咲田さん、大丈夫?

咲田 ああうん、多分

加瀬沢兄 おい、大丈夫か?(手を貸す)

渡井 ああはい、多分

咲田 ありがとうございます(起き上がる)

加瀬沢兄 病院へは(※加瀬沢兄の声は、加瀬沢部長同様、やけに掠れている)

渡井 ?(聞き取れず)

加瀬沢兄 病院

咲田 あ、ほんと、大丈夫ですから、ありがとうございます

兄 そうですか(歩き出す)

咲田 っていうか、ちょっと乗り物酔い?

渡井 え、大丈夫?

加瀬沢兄 (笑って) ずっと走行中ですからねえ

渡井 ?(聞き取れず)

加瀬沢兄 今から効果あるかわかりませんが、はいこれ酔い止め(ポケットから薬を差し出す)

咲田 あっ、ありがとうございます(錠剤を受け取る)

加瀬沢兄 うん。ところで、加瀬沢隆史の家、いや車両を、知りませんか

咲田 え?

加瀬沢兄 多分この辺かと…

渡井 あ、(改めて加瀬沢兄を見て) 部長の、ご親戚か何か…

加瀬沢兄 ああ、兄です
渡井 あっ。俺たち、部長の、営業部の、部下なんです
加瀬沢兄 おお、そうなのか？
渡井 はい、部長には、本当に、お世話になって…
加瀬沢兄 うん
渡井 あ、俺、渡井と言います（と、兄の前に手を差し出す）
加瀬沢兄 あ（と、自らの腹の下辺りにバケツをかざす）

すると、蛇口からバケツに水が落ちていく音がする。最後の一滴まで落ちる。

渡井 …ん？
加瀬沢兄 ああ、すまん。私は自動水栓蛇口に育てられたもので
渡井 え…？
兄 ああ、公衆トイレとかにある、ほら、センサーの
渡井 ああ…（と、もう一度、手を差し出してみる）
加瀬沢兄 あ（と、自らの腹の下辺りにバケツをかざす）

すると、蛇口からバケツに水が落ちていく音がする。最後の一滴まで落ちる。

渡井 え、どこから…（兄の身体を観察）
加瀬沢兄 ああ（と、錠剤を手を持ったままの咲田に気づき）よかったら（と、バケツを差し出す）
咲田 あ、（と、錠剤を口に入れ、バケツを受け取り、その水を飲み干す）
ありがとうございます

渡井 …。
加瀬沢兄 で、夕子さんと勇太くんはどこにいるかな

渡井 …じゃ、部長も…？

加瀬沢兄 ん？

渡井 センサー蛇口に…？

加瀬沢兄 ああ、もちろん。育てられたよ。…で。どこのかな？

咲田 あ、多分、こっちです。ご案内します（歩き出す）

加瀬沢兄 ああ、ありがとう。すまないねえ（着いていく）

渡井 ……。（咲田に続いて歩き出す）あっ…（と、急に立ち止まる）

加瀬沢兄 おお（渡井が自分のすぐ前で止まったのでセンサーが働く。バケツをかざす）

すると、蛇口からバケツに水が落ちていく音がする。

渡井 （靴の中の小石を捨てて、靴を履いて去っていく）

加瀬沢兄 あ、ちょっと。待って…

最後の一滴まで落ちる。三人は下手に去っていく。

SCENE 『心革』

三人が去ると、頭の上に白い大きな輪っかをつけた、白タイトの二人、
上手前から、辺りを伺いながら、別々にやって来る。
誰もいないのを確認してから、それぞれ座席の上に立つ。
そこに下手から、男女がやって来る。

男 え、いいじゃん

女 男 女 男 女 男 女 男 女
え、やだよ、こんなところで
だつてしょうがないし
やなもんはやだし
じゃあどうすんの
どうもしないの
誰もいないのに？
誰か来るかもしれないじゃん
誰も来ないって
ちよつともう、やだつてば！ やめてよ！ いや！

男、女を座席の方へ押し倒すと、白タイツに気付く。

男 白 男 白 男 白 男 白
えつ、なに？
え？
なにあんた
つり革です
いや、……人でしょ？
いえ、つり革です
いや……
つり革です
でも(輪っかが頭の上にあるので)……逆ですよ？

離れた席に立った白タイツ、唐突に叫ぶ。

白 男 白 男 女 男 女 男 女 男 女
今から逆さになりますから！
は……
(物凄い剣幕で) つり革なんです！ 私、生まれつき、つり革なんです！
……………
…ねえ、しないの？
えっ
するんじゃないの？
ああ、でもこれ……(白タイツ達を見る)
え？ つり革でしょ？

驚く白タイツら。

男 白 女 白 男 女 男 女 男 女 白 男
え？ でも……
はい……、つり革なんです……
ほら、つり革だつってんじゃない
あ……
しないなら行くよ
え、どこに？
(そつと女に頭を向けてみる)
(その頭の輪っかを握って) えー、どこでもいいじゃん、ほつといてよー
……！ (声は出す、特別動きもしないが、気が狂わんばかりの喜び)
……！ (声は出す、特別動きもしないが、気が狂わんばかりの嫉妬)
(その二人の様子を見て) いやその……
(輪っかから手を離して) じゃ、行くからね(と、上手前に歩き出す)
あつ、ちよつと待てよ

白タイト二人、無言のまま押し退けあいながら、女に着いていく。

男 おい、着いてくよよ、どっか行けよ

白タイト2、男を殴り殺さんばかりに殴って、女を追っていく。

FILM 『素通じ』

キャスター ニュースです。国土全土を配送貨物列車とされた日本政府は、シアトルにあるアマゾン本社に抗議の声明を発表しましたが、走行中のため声明は届かず、この問題は素通りされました。

車両内に整理した内閣一同。横移動していく様子。

キャスター また同様に、世界経済は元より不安定化する核開発問題等、各国において重要な話し合いが行われるG7、主要国首脳会議においても、日本政府の発言は、素通りされることとなりました。

車両内に整理した内閣一同。横移動していく様子。

キャスター 次のニュースです。先ほど各地の公衆トイレにおきまして、ロールタオルとジェットタオルが、仲睦まじく寄り添うように、隣り合わせに設置されているのが、発見されました。いつの間にかこのような状態になったのか、設置業者に記録はなく、関係者は首を傾げているということです。

隣り合うタオルの映像。ジェットタオルの音。

SCENE 『照明2』

武田朝子、買い物をしたエコバックを持ち、下手からやって来て、映像を見る。

朝子 ……え？

健太 (追って走ってくる) あ、母さん、やっぱり母さんだった。あのね、父さんの

朝子 (遮って) ねえ……。あれ、お父さんじゃないわよね？

健太 え……。 (映像を見てから朝子に) ……何言ってるの？

ねえ、そんな事より父さんの開発した設備が

渡井と咲田、下手からやって来る。

衣装と髪型が、少しスタイリッシュになっている。

渡井 (映像を見て) あ、武田さん……？

！

咲田 (同じく映像を見て) あ、やだ、武田さん。あんなところで何してるの？

朝子 (二人を見ずに) 違います。他人の空似です

咲田 (映像を見たまま) え、なんで加瀬沢部長の奥さんと……

朝子 (笑って) うちの人は、あんなじゃありませんから

咲田 え？

渡井 あ、武田さんの…
朝子 はい、そうです（テレビを消す、映像消える）うちの人は、ちょっと出遅れましたけど、今日も仕事ですから。今も仕事してますから（と、買ってきたキャベツを座席に置き、バックから牛乳を出す）

咲田 え、でも…
朝子 （牛乳を持ったまま冷蔵庫を探す）
渡井 （朝子に）ああ、そうですね、そうでした、そういうえ来てました
渡井 え？、でも
渡井 いいから（と、咲田の手を引き下手へ戻るうとする）
健太 ちょっと待って、ミナモト商会のひと？
朝子 え？ …そうなの？

渡井 ああ、はい（仕方なく戻って）営業部の渡井と、開発経理担当の咲田です
咲田 （スタイリッシュなポーズ）
朝子 そうですか…
健太 ねえ、加瀬沢部長、どうしたの？ なんであんなことに？
渡井 え…？
健太 原因は？ 何か知らない？
朝子 え？なに？ 何かあったの？

渡井 あ…（咲田と顔を見合わせてから）はい…、それが…
咲田 （朝子の襟足辺りから、紐が少し垂れているのを見つける）ん？

深刻な雰囲気になる。

渡井 仕事中に、社に連絡が入りまして…
咲田 （その紐を手に取り引っ張って見ると、結構、長い。先端にプラスチック）
渡井 どうやら、駅のホームから…
咲田 （それを引っ張ってみる）

するとカチツと音がして、照明、やけに明るくなり。

渡井 （物凄く明るく）なななんと！飛び降りたんですよ！なんの躊躇もなく！
朝子 （物凄く明るく）あらまあ！びっくり！
健太 （物凄く明るく）そうらしいんだよ！
咲田 （もう一度引っ張ってみる）

カチツと音がして、照明、元に戻り。

渡井 （暗い状態に戻り）でも、何が原因かは、我々にも…
朝子 （暗い状態に戻り）そうなんですか…
健太 （暗い状態に戻り）でもさ、なんかあったんじゃない？気づかなかった？会社でさ…
咲田 （また引っ張ってみる）

カチツと音がして、照明、やけに明るくなり。

渡井 （物凄く明るく）いや、まったく検討がつかないね！寝耳にミススマシ！ってな
朝子 （物凄く明るく）あははは、やだ面白い！
健太 （物凄く明るく）ひどいや、真面目にきいてんのにさ！
咲田 （また引っ張ってみる）

カチツと音がして、照明、元に戻り。

健太 (暗い状態に戻り) うちの父さんとなにかあったとか…

渡井 (暗い状態に戻り) …えっ? (と、異変に気付き、咲田の持っている紐を見る)

健太 (それに気づいて) ああ、母さんは蛍光灯に育てられたんだ

渡井 …え? 蛍光灯?

健太 うん、電気

朝子 ああ、そうだったわね… (振り返って紐を触り)

咲田 もう何年も誰も引っ張ってくれなかったからすっかり忘れてたわ…。昔はよく…

(また引っ張ってみる)

カチツと音がして、照明、やけに明るくなり。

朝子 (物凄く明るく踊りながら) こうしてみんなで楽しい一家団欒を!

健太 (物凄く明るく踊りながら) へいへいへいへい!

渡井 (物凄く明るく踊りながら) うわあ、あっかるいなー!

咲田 (また引っ張ってみる)

カチツと音がして、照明、元に戻り。

渡井 ……。咲田さん、やめてくれないか

咲田 え?

渡井 …その紐を

渡井、その紐を寄越せと、咲田に近づくと、

咲田が持っている小さな手帳に気付く。

渡井 ……ん? それなに?

咲田 あ、加瀬沢部長の部屋にあったんです

渡井 え、部長の家から?

咲田 あ、車両です

渡井 え、勝手に持って来ちゃったの?

咲田 だって、たまたま見つけちゃって

渡井 だからってそんな

咲田 だって、誰も居なかったし

健太 なんですか、それ

咲田 あ、部長の部屋の押し入れの、奥の方ーにあったのをね、たまたま見つけたの

渡井 咲田さん…

朝子 ほら、何か秘密が書いてあるかもしれないし (手帳を開いて見せる)

渡井 (それを制しようとして) よくないわ、そんなの。誰だって知られたくないことが…

朝子 (手帳の文字を見る) え?…センサー?

渡井 えっ? (手帳を奪って読み) あ、やっぱり部長も、センサー蛇口だったんだ…

朝子 ノータッチ水栓!

渡井 あ、はい…

健太 え、なにそれ…

渡井、そのまま、その手帳を読み始める。

渡井 「ここ数年、徐々にセンサーがおかしくなってきた。すぐに水が漏れてしまう。いつも漏れてしまっていて、ごまかしきれなくなってきた。こっそりと開発部に行き、武田くんに乾かしてもらうのも、もう限界だ……」

間。

渡井 「何より、家でいつも私を拭ってくれる妻には、恥ずかしくて申し訳なくて、いたたまれない……」

……

渡井 「最近蛇口も古くなったのか、茶色く濁った水しか出なくなった。もう、家に帰ることができない……」

少し間。徐々に照明が暗くなっていく、渡井周辺のみを照らすような感じに。渡井、ページをめくって、続ける。

渡井 「だから私は常に、マグカップを持ち歩くことにした。

自らセンサーを刺激し水を出し、それを、飲み干していけばいい……」

じゃ、あれは……

朝子 そのため……

照明、一段と暗くなり、渡井周辺のみ灯りに。

朝子が身を乗り出したので、咲田、一番遠くなり、手帳がよく見えない。

渡井 「そうして私は、濁った水を飲み続けた。カフェオレだと偽って、飲み続けた……」

……

渡井 「そのせいか私は体調を崩し、病院に行った。しかし身体に特に異常はなく、精神科を勧められた……」

咲田、よく見えないので、朝子の紐を引っ張る。

するとカチツと音がして、照明、やけに明るくなり。

渡井 (手帳を見たまま) 「そこでの、診断結果は……」

朝子 ピンポン！(早押しボタンを押した仕草)

健太 はい母さん、早かった！

………鬱病！

咲田 (手帳を覗き込んで) ピンポンピンポンピンポン！

四人、歓声を上げてハイタッチすると、楽しいな音楽が鳴り、歌い出す。

咲田・健太 (歌) それでこここのとこ、塞ぎ込んでたのね

渡井・朝子 (歌) 確かにここんどこ、元気がなかったな

健太・咲田 (歌) じゃあそのせいだね、飛び込んだのは

朝子・渡井 (歌) なんてかわいそうな、部長さん……

華やかなバックダンサーたちが、声をあげ、踊りながらやって来る。

以降、全員で歌い踊る。

朝子・健太 (歌) 鬱病にかかって飛び込んだ

渡井・咲田 (歌) なんの躊躇もなく飛び込んだ

朝子・健太 (歌) きっと死体はバラバラねー
渡井・咲田 (歌) こっば微塵にバラバラさー
ダンサー (掛け声) フー！
全員 (歌) ラララ部長さん、ラララ部長さん、ラララ部長さん、ラララ部長さん、

その途中でいきなりバチンと音がして、照明、暗くなる。

朝子 (照明が暗くなったことに対して) え……？
渡井 (暗い状態に戻り、やっと声が出る) ……そうだったのか
咲田 (暗い状態に戻り、やっと声が出る) ……部長

そこでまたバチンと音がして、照明、派手に明るくなる。

全員 あはははは！

そしてまたバチンと音がして、照明も皆の表情も、かなり暗くなる。

朝子 ……あ。(少し間) ……球切れ？

全員、朝子を見る。朝子、全員を見る。
と、同時に、ひときわ大きく、バン！と音がして、真っ暗になる。暗転。
そのまま少し、間。

FILM 『解放』

音楽のみで、伊沢の国連での演説風景。
拳を振り上げる伊沢。その隣には手話通訳。画面下には各国語の字幕。
そして解放戦線の戦闘風景。爆発。逃げ惑う人々。

沢山のつり革がポールから切り離され、車内に、駅のホームに、転がっている。
草原に、砂漠に、転がっている。海に浮かんでいる。山頂に登っている。
メリーゴランドに乗っている。水上スキーをしている。サーフィンをしている。
ハンモックに揺られている。

そして素敵な音楽のままニュース。

キャスター ニュースです。先ほど遂に北朝鮮が、首都、平壤近郊の平城(ピョンソン)付近から、
日本に向けて弾道ミサイルを発射しました。
先ほど遂に、北朝鮮が、日本に向けて弾道ミサイルを発射しました。
しかし日本は走行中のため、ミサイルは日本を素通りします。

ミサイルの飛んでいく様子。

SCENE 『伝説』

ジョニーさんと、ジャズマン二人、ケニーとダニーが、下手からやって来る。
座席には朝子の置いたキャベツが一つ。

ジョニー まいったな、こりゃいったいどこなんだ
ケニー ジャズバー・ルージュが、てんで見当たらねえや
ジョニー (キャベツを見る)
ダニー (振り返って) ごめん、シヨコラ。どうやら俺たち、完全に迷ったみたいだ
ケニー (振り返って) シヨコラ？

翔子、自分を両手で抱き、やって来る。

ジョニー おい、大丈夫か？

翔子 ええ平気。なんでもないの…

ダニー でも、具合が悪そうだぞ

翔子 ほっといて！

ケニー おっと、どうしたシヨコラ？

翔子 (笑って) 私、電車なんて、一度も乗ったことなかったから

ジョニー ああ

翔子 六本木で生まれ育って、親のジャズバーで歌い始めて…

ダニー ああ、だから具合が？

翔子 あの街から一步も出たことなかったんだから！ ねえ、私、降りたいわ。降ろしてよ

ケニー いや。それは無理だよシヨコラ。もうどこも車両だ

翔子 私は翔子よ！ もうシヨコラじゃないの！

しゃがみ込んでしまう翔子。キャベツを見るケニー。

ジョニー どうしたんだい、シヨコラ

翔子 もうやめて…、放っておいて…

ダニー あんまりワガママ言うんじゃないよ。本当に放っておいていいのか？

翔子 ……

ケニー ああ。お前にはジャズしか経験ねえんだから。一人じゃ路頭に迷うしかないだろ？

翔子 そんなことないもん！

ジョニー シヨコラ。大丈夫。俺たちはお前を見捨てたりはしないよ。何よりマスターが…

翔子 マスターなんて大嫌い！

ケニー おい、なんてこと言うんだ。マスターは

翔子、顔をあげる。

翔子 だって…

ダニー シヨコラ？

翔子 だって…

ケニー シヨコラ？

電車の走行音が、小さく聞こえ始めている。翔子、立ち上がる。

翔子 この、電車の走行音のビート…、マスターの作業なんでしょ…？

ダニー シヨコラ？

翔子 この、ジャジーな即興性と変速性…、マスターの作業なんでしょ…？

ジョニー ああ、そうらしいが…

翔子 ああ…！ ダメ…、パッションが…！

音楽イン。翔子、ゆっくりと歩き出す。

ケニー …！まさかシヨコラ…
ダニー まさか……
翔子 もう…、我慢できない……

翔子、どこからか、マイクを取り出す。

ダニー おい、マスター……！ 岡部マスター……！
ケニー マスター……！
ジヨニー マスター……！
翔子 静かにしな！……このシヨコラが、歌うんだよ

静まる三人。ゆっくりとポケットから、鈴を出す。

翔子 Summer time……

歌い出す、翔子。それぞれジャジーに鈴を奏でる、ジャズマンたち。
しかし最初の一節以降、その魂の歌声は声にならず、全く聞こえない。
そこに咲田、慌ててやって来る。渡井も「ちよっと待って」と追ってやって来る。
二人は更に前衛的な、スタイリッシュな風貌になっている。

咲田 あっ、やっぱり、シヨコラさん…
渡井 あ…。(翔子が歌っているのを見て)…これが、伝説の？
咲田 ああ、素晴らしい……！

歌を聞きつけて、ジャズファンらしき中年男女がやって来る。
口々に感嘆の声を漏らす。

咲田 ああ…、こんなにもジャズファンたちが歌を聞きつけて…
渡井 ……。
咲田 あ、マスターは…？ 岡部マスターは…？
男女ら (うっとり酔いしれる)
咲田 (岡部を探し、走り回る) マスター……！ マスター……！ シヨコラさんが……！
しかし、音楽は、静かに終わっていく。

咲田 シヨコラさん……
翔子 (座席の上に登って)…サンキュー
そう言つと、翔子、電車の窓から飛び降りる。

全員 …！
翔子、そのままゴロゴロと前方に転がり見えなくなる。
一同、騒然。

全員 (口々に)シヨコラ！
ケニー おい！ 停車させるよう車掌に言うんだ
ジヨニー どこかに非常連絡ボタンが…

ダニー
（すでに押ししており）すみません、人が落ちたんです！
車掌
（非常連絡ボタンからの声。しかし甘い声優声）「どうしたんだい？子猫ちゃん」
ダニー
は…？
車掌
「車掌のCVだよ、子猫ちゃん」
ダニー
なんだこれ……
ケニー
おい、直接行くぞ！

ジャズマンたち、追ってジャズファンのうち二人も、下手に走って去る。

SCENE 『欠陥2』

まだ騒然とするなかで。

咲田
どうして、どうしてシヨコラさん…
渡井
でも、これで停車させられる…
咲田
え？
渡井
電車を停車させないと
咲田
え？
渡井
さつき見たんだ、ほらここ…（加瀬沢の手帳を開く）

残ったジャズファンは、唯一若めの男性、潤一と、中年夫婦。

潤一
無理ですよ
は？
潤一
停車はさせられません
何言ってるんだあんた！
妻
シヨコラさんがどうなってもいいの？
潤一
二度と歌えないと言われていたシヨコラの、あれが最後の歌だったんです
咲田
え？
潤一
一度でも歌ったが最後、爆発する運命だったんですから
咲田
爆発？

遠くで、爆発音。

咲田
え？なんで？
潤一
それに父が運転席に居ます。父が停車をさせません
父？
妻
（窓の外に）シヨコラー！
潤一
こうなったら爆破しても止めてやる。あんた、火炎瓶を作って

夫は走るが、潤一、背後から妻を掴まえ、その首を肘で絞める。

夫
あつ
妻
あんた

順一、妻の首の骨を折る。

座席上に崩れ落ちる妻。思わず座席上のキャベツを手に取る夫。

夫
（キャベツを見て）え……

潤一 諦めてください。もうシヨコラは
夫 (キャベツを見たまま) え……
夫 ……父って誰だ？ 誰が停車をさせない？
夫 (キャベツを持ったまま妻に) おいっ…、お前、お前…
潤一 岡部です。岡部潤一郎
渡井 え、JRの、社長の…
咲田 (渡井に) マスターです
渡井 そうだ、あの社長が、武田さんの開発設備を…
咲田 (渡井に) マスターですって
潤一 はい。設置させました
渡井 ここに全部書いてあったぞ！ 加瀬沢部長がああ社長と、秘密裏にそう、約束したって
咲田 (渡井に) マスターですってば
渡井 うるさい！

渡井、咲田を思い切り突き飛ばす。倒れる咲田。

潤一 その通りですよ
渡井 それは、その設備に重大な欠陥があると知ってのことか！
潤一 もちろん
渡井 どうしてそんな…
夫 (渡井を見る)
咲田 (倒れたまま) え？ 渡井さん、どうしたんですか
潤一 すでに設置は終わっています
渡井 咲田さん。重大な欠陥が、あつたんだよ…。本当の、重大な、欠陥が…
咲田 え…？
渡井 武田さんの開発には、いつも、役に立たない欠陥があつて、
だから、使い物にならなかったのに…
咲田 渡井さん？
渡井 加瀬沢部長は、それを面白がつてたけど、実用化は無理だつて、言つてたのに…
咲田 (手帳を咲田に投げる)
渡井 (それを拾つて、ページを探す)
咲田 (ページをみつける) ……あ
渡井 ……大変なことになる。電車を、止めないと
潤一 止めさせません
渡井 だつてこのままじゃ
潤一 知っています
渡井 だつたらなんで
咲田 (読みながら) 渡井さん、これって…
渡井 今や列島全部が車両なんだぞ！ 逃げ場が…！
潤一 ありません。ちょうどいいじゃないですか…！
夫 ……なんなんですか？ 車両が、どうなるんですか？
咲田 (手帳を見たまま) 光速を超えます
夫 えっ？
咲田 (手帳を見たまま) 光速を超えます
夫 えっ？

渡井、スタイリッシュな衣装についたガンベルトから、拳銃を取り出す。

渡井 俺が社長を止めてやる
夫 あっ、あんた
順一 駄目です

潤一、走り出した渡井を掴まえ、殴り、素早く肘で首を締め付ける。
拳銃、落ちる。

渡井 (もがきながら) どうしてだ! どうして、部長も、あの社長も、あんたも、そんなに
咲田 (悲鳴をあげて) 渡井さん! マスターです!
渡井 (もがきながら) 光の、速さを、超えたら……、全ての、時間が、逆行を……
潤一 (最後の力を入れようとすると)
渡井 (気が遠くなりながら) 列島全土の……、未来が……

そこで咲田、拳銃を拾い、渡井の意識の無くなる前に、潤一のかめかみを撃つ。
頭から血を吹き出して、倒れる潤一。渡井、解放されて、ようやく振り返る。

渡井 え……、咲田さん……
咲田 渡井さん、行きましょう
渡井 え……
渡井 電車を止めないと(拳銃を格好良く構える)
咲田 ああ……
渡井 未来がなくなります
咲田 ああ……
渡井 だから(走り出そうとする)
渡井 ああ……(それを引き止めて) 俺たちの未来をなくしちゃいけない
咲田 え?
渡井 ごめん、愛してる
咲田 ?
夫 ?
渡井 ?

加速する走行音が、とても小さく聞こえ出す。

渡井 あ。ごめん
咲田 …。なんで謝るんですか
渡井 え?
咲田 私も、です!
渡井 え……

見つめ合う二人。
夫が怪訝そうに二人を見つめるなか、渡井と咲田、向き合い、
キスをしようと近づいたところで、走行音は更に加速し、光速を超える。

逆行、開始。

これまでの台詞と動きが、早回しでひたすら、逆行していく。
そんなことしていたかよく分からない行動なども、逆行していく。
そして光速を超えた走行音は、楽しい音楽になっていく。

音楽はそのまま、シーン「欠陥2」の逆回転を終えたら、入れ替わりに、マグカップを持った加瀬沢部長が現れる。

以降、全ての転換と場面を、早回しの逆回転で。

加瀬沢のもとに、岡部がやって来る。

・マグカップを持った加瀬沢と岡部が、固く握手をする場面。

岡部が去り、武田がやって来る。

・マグカップを持った加瀬沢を、武田が乾かしてあげている場面。

武田が去り、夕子がやって来る。

・マグカップを持った加瀬沢、濡れた服を夕子から隠し、夕子が加瀬沢の態度に、嘆く場面。

夕子が去り、少し若返った武田がやって来る。

・マグカップを持った加瀬沢に、武田が凶面とボルトを見せ、加瀬沢が笑う場面。

そこに岡部がやって来る。

・マグカップを持った加瀬沢に、岡部がジャズの名盤を見せ、三人で盛り上がる場面。

武田と岡部が去り、マグカップを持った、少し若返った夕子と、ランドセルに黄色い帽子の勇太が、やって来る。

・勇太はラッピングされた箱を持っている。勇太が二人に、プレゼントを渡す場面。
(加瀬沢と夕子のお揃いのマグカップが、勇太の箱に戻っていく。)

夕子が去り、浮き輪とプール用のバックを持った、小学生の健太がやって来る。

・勇太と健太が、加瀬沢にプールに連れて行ってもらおう場面。

加瀬沢と勇太と健太が去る。更に若返った武田と朝子がやって来る。

・武田が、朝子に、プロポーズする場面。

更に若返った岡部と翔子がやって来る。

・岡部が、翔子の歌に、聞き惚れている場面。

そして、武田と朝子と、岡部と翔子、一列に並んで、並んで喝采する。
タキシード姿の若返った加瀬沢と、ウエディングドレス姿の夕子、やって来る。

・加瀬沢と夕子が、誓いのキスをする場面。四人がそれを、囁し立て、祝福する。

夕子と武田と朝子と翔子が去り、加瀬沢と岡部だけが残る。

・加瀬沢と岡部の、別れ話。喧嘩し、涙し、キスをする。

加瀬沢と岡部が去り、妖しいマスクで鞭を振る翔子と、亀甲縛りの武田がやって来る。

・武田と翔子のS Mプレイ場面。

武田と翔子、去っていく。

以前の渡井、咲田、伊沢が、各々、電車に乗り込んでくる。互いにまだ他人同士。

それぞれに、つり革に掴まったり、座席に座ったり。

勇太や健太や岡部や武田も、各々、電車に乗り込んでくる。

過去のいつかの乗車風景。

それぞれに、つり革に掴まったり、座席に座ったり。

そして全員、四方に去って行く。

FILM 『ENDING』

音楽はそのままに電車の映像。

オープニングと同じ、つり革を持ってギュウギュウに一塊になり、色々な場所を移動する通勤通学の人々。

そして、白人女性キャスターの、どこかの国のニュースが始まる。

音声は英語。日本語字幕。

女キャスター

先ほど、日本列島が突然、姿を消しました。繰り返します。

先ほど、日本列島が突然、姿を消しました。

これにより、国際発送便に大量の不着があり、出品者の評価は軒並み低下。

星の数がだいぶ、減ったということです。

原稿を読み終わり、カメラ目線の笑顔で。

女キャスター

それ以外の影響は、特にありません。

座席前、明転。

映像に順にキャスト名。一人ずつ出て来て、座席前に一列に並ぶ。

全員並んだら、全員、前に出て、一礼して、去る。

再び電車の映像があり、線路に飛び降りる黒い影は、逆回転で浮き上がる。映像終わりで、客電が明るくなる。

げんこつ団『コースター』

脚本・演出・映像・音響 一十口裏
振付・演出 植木早苗

出演

植木早苗 岡部潤一郎 武田朝子 五十嵐 次長 恭吾 夕子2 ポツカ ケニー 加瀬沢兄 電車好きな男 ほか
春原久子 武田健二 高羽 デモ隊女1 ジョニー 音響監督 美樹 カップルの男 電車好きな男 乗客男性 ほか
河野美菜 加瀬沢勇太 救急隊員1 鉄郎 茂 つり革 夫 電車好きな男 ダンサー 乗客女性 ほか
望月文 渡井 チョッキのおじさん 中年女性 声の人 電車好きな男 ほか
池田玲子 加瀬沢隆史 翔子 駅員 デモ隊女2 つり革 ヨーコ 弱ジェイソン 乗客男性 ほか
三明智実 加瀬沢夕子 永江 女子1 涼森 デモ隊男1 ダニー ダンサー 乗客男性 ほか
川端さくら 車掌 京子 女子2 カップルの女 乗客女性 ジャズファン ほか
丹野薫 咲田 店員 救急隊員2 森 乗客女性 ほか
鈴木琴之 武田健太 千夜 ジャズファン 乗客女性 ほか
久保田琴乃 駅員 ジョン デモ隊男2 ジャズファン 乗客男性 ほか
秋月三佳 伊沢 岡部潤一 小林 メーテル ダンサー 乗客女性 ほか

照明 山岡茉友子 / 音響オペ 吉田有花 / 映像オペ 信広天音 / 舞台装置 島山英樹
協力 株式会社テンカトル 株式会社ボックスコーポレーション 株式会社オフィスチャープ
乙女装置 涙目キューピー 島山工務店
制作 げんこつ団事務所

もしも本作品を、上演、引用などされる場合には、
ご連絡先とご氏名、その内容を明記のうえ、
必ず左記アドレスまで、ご連絡ください。
一部分であっても断わりのないご使用は、禁止させていただきます。

info@genkotu-dan.official.jp

(問) 0369138012 げんこつ団事務所